

東日本大震災

2周年追悼

被災地支援職員の記録集



岩手県大槌町の仮設校舎から元気に下校する子どもたち
彼らの笑顔のために頑張っています！

箕面市

もくじ

はじめに

1. 緊急消防援助隊	3
2. 避難所支援・給水支援	49
3. 保健業務支援	83
4. 学校建設・営繕支援	145
5. 戸籍事務支援	197
6. 草の根支援	217
おわりに	255

はじめに

平成23年3月11日に東日本大震災が起きました。

亡くなられた方々、最愛の人を失われた方々に深く哀悼の意を表するとともに、始まったばかりの復興への道のりで数々の苦難に立ち向かわれている被災者の皆さまに心からお見舞いを申し上げます。

あれから2年。箕面市では、発災直後から職員を被災地に派遣し、支援を続けてきました。

これは、被害の大きさと惨状を目の当たりにして、いても立ってもいられず、少しでも何かできることはないかという気持ちはもちろん、いつ私たちが助けられる立場になるかわからないことを考えれば、地域として当然のことという気持ちもあります。そしてまた、本市職員が支援に携わるなかで災害対策について身をもって学び、箕面市の防災体制にも大きな経験の蓄積となるだろうという気持ちからでもあります。

箕面市は、大阪府や大阪府市長会が編成した支援部隊の一員として、岩手県をカウンターパートとして支援を行ってきました。なかでも、発災直後に現地に入った緊急消防援助隊の箕面市隊が岩手県大槌町で活動したことをきっかけに、大槌町を特別なカウンターパートとして支援を続けています。

大槌町では、町長を始め多くの職員が津波の犠牲になったこともあり、特に行政機能に混乱をきたしていたようです。支援に赴いた職員らから聞く被災地の状況は、13万人の箕面市民の命を預かる身として、改めて深く考えさせられるものでした。真に住民を大災害から救うためには、私たち自治体は、そして自治体職員は、平常時から何をし、そして発災後何をすべきなのかと。

その強い想いの中で、箕面市でも防災改革に着手しました。台風などによる小規模な風水害中心の防災体制を抜本的に見直し、万一、大規模地震により行政が壊滅的な被害を受けても、助かる命を助けることができる地域防災体制を作り上げることがめざしています。

この2年間で、多くの市民の皆さまのご尽力をいただき、本年1月17日には、本市で初めて、大規模地震を想定した全市一斉総合防災訓練を実施することができました。これを始めの一步として、たとえ箕面市が東日本大震災レベルの大災害に見舞われても、一人でも多くの命を救うことができる防災体制を作り上げていきたいと思っています。

今回ここに、これまで被災地の支援に入った箕面市職員たちの、派遣直後の報告書、派遣から少し時間が経ってから書かれた手記、派遣中に現地の様子をレポートしたブログ記事やメールの一部をまとめました。

ここに記された職員らの体験は、その時そこにいられなかった多くの人の心を打ち、真の復興まで休むことなく支援を続けていかなければとの想いを改めて強くさせてくれることと思います。そして、もちろん箕面市も、これからも支援を続けていきます。

同時に、東日本大震災を教訓に、今後必ず起きるであろう災害に備えるための教材とすることで、箕面市の防災体制強化に全力で取り組んでいきたいと決意を新たにしています。

平成25年(2013年)3月

箕面市長 倉田哲郎

1. 緊急消防援助隊

Contents

職員手記

消防本部	赤阪	浩二	(緊急消防援助隊第 1 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	中平	陽之	(緊急消防援助隊第 1 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	黒崎	徹	(緊急消防援助隊第 1 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	宮下	正士	(緊急消防援助隊第 1 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	宮原	将樹	(緊急消防援助隊第 1 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	林下	幸祐	(緊急消防援助隊第 2 次派遣	任務：救急隊)
消防本部	稲尾	良明	(緊急消防援助隊第 2 次派遣	任務：救急隊)
消防本部	出口	哲	(緊急消防援助隊第 2 次派遣	任務：救急隊)
消防本部	黒河	博幸	(緊急消防援助隊第 6 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	後藤	実	(緊急消防援助隊第 6 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	広田	大造	(緊急消防援助隊第 6 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	西川	順喜	(緊急消防援助隊第 6 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	松浦	光洋	(緊急消防援助隊第 6 次派遣	任務：消火隊)
消防本部	依田	崇	(緊急消防援助隊第 6 次派遣	任務：救急隊)
消防本部	山口	慶太郎	(緊急消防援助隊第 6 次派遣	任務：救急隊)
消防本部	黒木	達明	(緊急消防援助隊第 6 次派遣	任務：救急隊)

職員手記

消防本部 赤坂 浩二 (緊急消防援助隊第1次派遣 任務：消火隊)

東日本大震災により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。また、被害を受けられた皆さまに1日も早い復旧・復興を心よりお祈り申し上げます。

平成23年3月11日(金)午後2時46分頃、東北地方の三陸沖を震源とする地震が発生し、その後、津波により甚大な被害が出ているニュースを消防署の事務所で見ました。ひょっとしたら、緊急消防援助隊の要請が来るかもしれないと思い、通常業務と平行して、後輩らとともに緊急消防援助隊用資機材を確認し、出動に備えて車庫へ運びました。

その後、大阪府北ブロックの代表消防本部である高槻市消防本部から出動可能隊数の調査があり、上司の指示の下、要請された場合の出動人員の調整と休暇者への連絡を行っているなか、ほどなくして万博公園東駐車場に午後8時30分集合との出動要請が来ました。

上司の命令で私、赤坂以下5名の出動隊員が決定し、約1時間30分の間に人員の補充、当務員及び警備課員の協力を得ながら資機材の積載、食料品の調達等を同時進行で行い、準備が整いました。この時、私は16年前の阪神・淡路大震災の遺族であり、「私と同じ辛い思いしてほしい。なんとしても、被災された方を助けたい。」という強い思いがありました。この気持ちを抱きつつ、箕面市消防本部を後にして集合場所に向かいました。

万博公園東駐車場では大阪府内の各隊が集結してきており、大阪市消防局(指



揮隊) から「大阪府隊は、車列を組んで東京方面へ向かう。」との指令を受け出発しました。

名神高速から東名高速を乗り継ぐなか、幾度かの給油と指揮隊からの情報提供・指令があり、隊員皆に、大阪府隊の一員で箕面市消防本部の消火隊としてこれから被災地へ赴き、活動するんだという士気が感じられました。

ここで是非、記述しておきたいのですが、足柄サービスエリアで、山崎製パンの運送トラックの運転手さん（名前不明）に出会い、話を聞くと「東北方面へ製品を届ける予定でありましたが、地震により首都高速が通行止めとなり、納品不能となったので、消防さんが現地に行かれるのなら是非、このパンを必要なだけ持って行って役立ててください。」と言われました。この運転手さんの判断にせよ、本社からの通達にせよ、大変すばらしい企業姿勢であると感じるとともに被災地に赴く我々にとっては、大変心温まる言葉であり、この思いに答えるべく、道中及び被災地にてすべて活用させていただきました。山崎製パンの運転手さん、本当にありがとうございました。



さて、大阪府隊は、出発から2日後の3月13日午前3時30分頃、野営地である岩手県遠野市運動総合公園に到着しました。

その後、ミーティングにより指揮隊から指令を受け、消防車内にて仮眠をとったあと午前8時40分、各部隊に分かれて同公園から釜石市内にて活動すべく出発しました。緊急走行しながらの道中、釜石市街へ入ると、通行する人々が皆、車列で走る消防車両に向かって、頭を下げ、合掌やお辞儀をされる姿が

とても印象的で、ここでまた一層、こちらの方の思いに応えねばという強い使命感が沸きました。

本隊は、釜石市内の被災地区に消防車両の活動スペースがないということで、途中の中継地点で、人員搬送バスに乗り換えて、市内の中心部に到着しました。

釜石市役所付近では、津波により町全体が壊され、道路には、がれきが散乱している状態で、本隊は、北ブロックの消火隊と合同で、がれきを除去しながら人命検索活動を行いました。

ある一人の男性から地震前の住民の情報が得られたため、その情報をもとに1階部分が損壊している民家を検索し、1体のご遺体を発見し、安置場所まで搬送しました。また、検索中、余震が発生し津波警報が出たため、一時高台に待避し、解除を待ったあと、再び検索をしましたが、残念ながら生存者の発見までには至りませんでした。

日没になって活動が終了し、野営地へ引き揚げました。その日は、午後10時頃に大阪府隊ミーティングがあり、翌3月14日の活動場所の指令を聞いたあと、消防車内で仮眠につきました。



3月14日午前5時30

分起床、ミーティングの後、当日の活動場所は、釜石市の北隣に接する大槌町という町で、まだ手つかずの状態であるとの情報でした。釜石市内から山道を走行して、途中、津波で半ば潰された5階建の団地2棟を横目に見て、大槌町に入りました。少し小高い道路から町を臨むと、「えっ、これは、」と目を覆いたくなるような悲惨な光景が広がっていました。

町と思える地域全体が広範囲に根こそぎ津波で潰され、線路のレールも土台から彎曲・断線、町全体は灰色をしていました。阪神・淡路大震災当時の被災状況を見てきた私でさえ、これは、もう阪神・淡路のレベルどころではないと感じました。

本隊は、大阪市消防局の各区の救助隊と大阪府内の各消火隊の班構成で、担当区域の検索を始めました。壊れた線路を跨ぎ、土手の上を進むと、この付近は、強い熱で燃えた形跡がありました。救助隊員の示す位置を見るとそこには、一見しただけでは、判別のつかないご遺体が横たわっていました。

発見位置を救助隊長が指揮隊へ無線発報し、マーキングして先の検索に進みました。

前日の釜石市内の活動とは違い、道路と民家の境界も見えず、民家の殆どは、基礎部分しか残っておらず、そこに潰れた家屋や家財のがれきが重なり、あちこちで海水が溜まり、足の踏み場のない状況でありました。そこでの検索は思うように進みませんでした。

この時、無線に別の隊から、「軽自動車内に母子の遺体発見」の情報が流れ、なんとも悲しく悔しい思いがしました。

先に進むと、基礎部分だけが残る民家の一角に鉄筋コンクリート造2階建ての診療所と思われる建物がそのままの状態でありました。救助隊員とともに屋内進入すると、内部は手のつけようもないぐらい家具類、家財が散乱、通路も塞がっていました。落下しそうなガラスを避け、障害物を除去しながら1階から2階にかけて各部屋を検索しましたが、人の気配はありませんでした。このときも数回、余震があり、万が一、津波が来たら逃げ場のない状況であったため、大変、緊張した活動となりました。診療所の検索を終了して、引き続き午後4時20分頃まで担当区を検索しましたが、生存者の発見・救出には至りませんでした。

その後、大槌町の集合地点に戻り、到着したばかりの大阪府隊第6次隊と対面式を行い、申し送りをしたあと、野営地である遠野市立緑峰高校（運動総合公園から急遽変更）へ引き揚げました。北ブロック代表である高槻市消防本部の後方支援隊から大阪府隊第1次隊の解散・引き揚げの指示を受け、本隊は、第6次隊に車両と資機材を託し、3月15日午前0時30分に高槻市・豊中市消防本部のバスに分乗して、帰阪の途に着きました。東北自動車道から磐越自動車道、北陸自動車道を経由し、名神高速道路にて、23時00分に箕面市消防本部に無事帰署しました。

緊急消防援助隊の大阪府隊の一員として出動し、消防人生で貴重な経験・勉強をさせていただけたこと、また、消防本部・署で心配しながら帰りを待ち、

支えてくださった職員の皆さまに大変、感謝しています。本当にありがとうございました。

最後に私は、前の阪神・淡路大震災にて実家が全壊、両親と妹が倒壊家屋の下敷きとなり、近隣住民に救出されるも、母が死亡、その後、消火隊として神戸市兵庫区の兵庫消防署へ派遣されました。あれから16年という長い年月が経過し、今回、緊急消防援助隊として派遣させていただけたことで、亡き母への供養にでもなればと思います。

これから先、大規模災害は、決して起きてほしくありませんが、万一起きた場合、常に出動できる体制づくりへの寄与と心の緊張感をもって引き続き、勤務・精進してまいります。

職員手記

消防本部 中平 陽之 (緊急消防援助隊第1次派遣 任務：消火隊)

震災があったこの日、私は普段通りに職場に出勤し、近々署内で開催される警防技術錬成会の訓練に励んでいました。訓練をしていると場内に放送が入りました。「地震が発生しました。訓練を中止してください。」その時は、まさかこんな大規模な地震が発生しているとは微塵も感じませんでした。しばらくの間、訓練を中止し待機していると、各隊はすみやかに帰署するようにとの指示を受け、私のチームは指示に従い帰署しました。

帰署後、事務所に戻ると事務所内は慌ただしい雰囲気になっていて、そこで今回の地震はただ事ではないと感じました。情報収集のためテレビを見てみると、そこには映画の中でしか見たことのないような巨大な津波が町を襲っていて、私は一瞬自分の目を疑いました。

まさか日本でこんな大規模な災害が起こるとは想像もしていなかったからです。

もしかしたら緊急消防援助隊の招集がかかるかもしれないということで、私たちは出動の準備をし始めました。準備をしていると事務所に上がるよう指示を受け、そこで正式に出動要請がかかったことを知りました。当直責任者から1次隊のメンバーが発表され、私の名前もその中に含まれていました。私は消防士になって1年目である自分がメンバーに入るとは思っていなかったので、活動の機会をいただけたことに感謝しつつ荷造りを始め、大阪府隊の集合場所である万博記念公園の駐車場に向かいました。

大阪を出発してから約30時間後に、目的地である岩手県に到着しました。到着したのはすでに夜中だったので、その日は活動することなく次の日にそなえ仮眠をとることになりました。

朝になりその日に活動する場所



が釜石市に決まり、現地に行くとそこは自分の想像を遙かに超えた状況になっていました。テレビで見る風景と現地で見る風景はまったく違うもので、とてつもない衝撃を受けました。

私はその被災した風景を見ることによって、被災者を救えるのは私たちしかない、被災者のためにも頑張らなければいけないという気持ちが強くなり、今まであった緊張や不安がなくなりました。

実際に活動が始まると、私たちは人命検索に従事しました。瓦礫を1枚1枚どけていき要救助者を捜しましたが、瓦礫の多さで前に進めず思っていたほど活動ができませんでした。この時、私は自然の力の前では私自身の力など無力であることを痛感しました。

翌日は場所が変わり大槌町へ行きました。大槌町でも前日と同じ人命検索に従事しました。大槌町は町ごと津波に流されていて、建物らしい物がほとんど残っておらず、瓦礫しかない状態で釜石市よりひどい状況でした。その中で要救助者を捜すのに全力を尽くしましたが、要救助者を捜し出すことが出来ないまま活動は終了しました。結局この2日間で私たちは要救助者を捜し出すことが出来ず悔しい思いをしました。そして、私はもっと現地にいて被災地のために活動したかったという気持ちを持ちながら大阪に帰りました。

今回の派遣を経験して日々の訓練では得ることのできない、数多くのことを学ぶことが出来ました。近年起こると言われている東海・東南海・南海大地震が起きたときには、今回の派遣で経験したことを活かして、被災者の命を救いたいと思います。また、今回の派遣で、消防士としての技術や経験が少ない私を人選していただいた上司の方々には感謝の気持ちしかありません。今回の派遣に行きたかった職員が多々いるなかで、行かせてもらえたことに感謝しながら、これからも消防士としての仕事を頑張っていきたいと思います

職員手記

消防本部 黒崎 徹 (緊急消防援助隊第1次派遣 任務：消火隊)

はじめに、このたびの東日本大震災で亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げるとともに、被災地が一日でも早く復興されることを願っております。

地震発生時、私は救急出動による活動中で、揺れには全く気付きませんでした。ただ、救急車積載の携帯電話に、今まで聞いたことのないメールの着信音が数回鳴っていたため、不思議に思っていました。傷病者を病院搬送後、メールを確認したところ、「地震警報発令、区域日本全域」の様な内容だったと思います。発信元もよく解らなかったため、地震の訓練が実施されているのかと思い帰署後に確認することにしました。

午後4時前に署に戻ると、受付にいた職員から「大きな地震が発生し大変なことになる。通信指令室のモニターでテレビ放送を見ることができる。」と聞き、急いで通信指令室に駆けつけると、真っ黒な津波が海岸近くの農地をばく進し、全ての物を飲み込んでいる映像が映し出されていました。

にわかには、その映像が現実のものとは信じられませんでした。緊急消防援助隊の要請がかかる可能性があるため、準備にかかるようにとの指示があったことで、現実が発生している災害なのだという認識が湧いてきました。結局、午後6時半頃に消火隊の機関員としての出動指令があり、あわただしい出動となりました。

道中は名神高速から東名高速、建設中の新東名高速、東北自動車道と乗り継ぎ、2人で運転を交替しつつ30時間をかけて、出発より2日後の13日午前3時30分頃



に野営地である遠野運動公園に到着しました。到着前は睡魔との闘いだったの

で、無事に到着できた事に安堵したのも束の間、そのまま車中で3時間ほど仮眠し、午前6時半には起床して出勤に備えよ、との指令がありました。

活動初日(13日)は、釜石市においての人命検索活動との指令があり、野営地から被災地近くの集結地点へ消防車両で移動後、バスに乗り換えて被災地に入りました。活動地点に近づくにつれて、津波による建物の破壊状況が激しくなり、トンネルを抜けると、周囲一帯全ての物が破壊し尽くされて押し流され、うずたかく積み上げられている状況に息を呑みました。人力で一体どれほどの活動が出来るのか不安を覚えました、同時に早く検索活動を開始したいとの思いを強く持ちました。

活動場所は釜石市の市役所周辺で、住宅は破壊されているものの原形を留めており、道路は家財や車両、建築材などで溢れている状態で、津波が押し寄せた最終到達地点であることが想像できました。

初めは道路上の瓦礫を路面が見えるまで、手当たり次第に人力で移動させていましたが、次第に付近住民から行方不明者の情報が入り、該当する住宅内の検索に移行しました。夕刻の引揚げ指令までに、当該地区の活動隊全体で数体



のご遺体の発見に至りました。避難所である学校にご遺体を搬送する時、担架に集中している周囲の被災者の視線を全身に感じ、生存状態で救出できなかったことが申し訳なく、とても顔を上げる事ができませんでした。

活動二日目(14日)は大槌町での人命検索活動を指示され、大阪市消防局の救助隊と箕面市消防本部を含む複数の市町村の消火隊で小隊を編成し、担当区域の検索を実施しました。海岸に近い立地のためか、前日の釜石市とは状況が異なり、ほとんどの住居は基礎だけを残し跡形もなく消滅し、津波による泥に覆われていました。

海水により浸水している地域や、火災のため焦土と化した地域もあり、生存者が存在する可能性は著しく低いと思われ、絶望的な気持ちになりました。その後、瓦礫の隙間や変形し埋もれた車両、形を保ったまま流された住宅の2階部分の内部などを探しましたが、やはり生存者の発見には至りませんでした。

夕刻になり活動を終了し、自隊の消防車両を運転し野営地まで引揚げる際、燃え続ける山火事による煙で極端に視界が悪く、焦げくさい臭いと暗闇の中、ヘッドライトに映し出されるものは、約20メートル前方までの瓦礫の山とそれをかき



分けた道のみで、非現実的な光景に恐怖に似た感情を抱きました。

野営地に戻り、指令内容が錯綜するなか、深夜0時頃に大阪への引揚げが決まりましたが、あと数日は人命検索を続けたいという思いと、引揚げ指令に安堵する思いが入り混じりながらの帰途となりました。

今回の緊急消防援助隊としての活動は、私にとって大変貴重な経験となりました。この経験をふまえ、近い将来発生が予想される南海・東南海沖地震や直下型地震に対して十全に備える事が、私たちに課せられた使命であり任務であると考えています。

職員手記

消防本部 宮下 正士 (緊急消防援助隊第1次派遣 任務：消火隊)

平成23年3月11日、私は緊急消防援助隊大阪府隊第1次派遣のタンク車機関員として派遣を命じられました。同日19時45分箕面市消防本部を出発。集合場所である万博公園へ向かいました。20時45分、派遣先が確定しないまま関東方面に向かうこととなり、名神高速道路で隊列を組み東へ向け出発しました。

3月12日深夜、東名高速道路の静岡から東側が津波警報のため通行止めになり高速道路を降りることになったが、一般道を地元である静岡市消防局の先導で走行し、次いでまだ舗装されていない建設途中の第二東名高速道路を道路公団車両の誘導により走行、朝には再度、東名高速道路に乗り、足柄サービスエリアに至ったところで派遣先は被害の甚大な東北地方と聞かされ、気持ちを入れ直しました。サービスエリアでは、山崎パンの10トントラックが首都高速通行止めのため配達出来ずに停車しており、運転手さんから「自分たちはこれ以上進むことができないので、このパンを役立ててほしい」と言われ、その気持ちに感謝しつつ東名高速道路を出発、さらに首都高速でも道路公団車両に先導され、東北自動車道を北上しました。

東北自動車道は地震により道路がずれたり段差が出来た状態で通行不可能であったものを、道路公団が12日には通行可能な状態までに応急修理した道路を走行しました。

また通行止めをしているはずなのにサービスエリアでは我々緊急消防援助隊のために営業していたり、平泉前沢サービスエリアでは停電中の真っ暗な中にも関わらず、うどんとおにぎりを作っていただくなど、それぞれの方の気持ちが伝わり、本当に元気を与えられました。

30時間後の3月13日3時30分頃、遠野市消防本部の誘導により遠野運動公園に到着。ここへ到着するだけでも数多くの人の協力により無事到着出来た事を感謝しつつ、高まる気持ちを抑えて朝から始まる捜索活動のため車内で仮眠をとりました。

朝、我々とともに大阪を出発し疲れているはずの後方支援隊が早朝から用意してくれた朝食を摂り、釜石市へ向け隊列を組んで出発、走行中沿道の子どもからお年寄りまでが我々に手を振ってくれたりお辞儀や合掌までしてくれ、期待の大きさと任務の重要性を感じるとともに、力の限り活動することを誓いました。



集結場所には警察や自衛隊も到着していました。搜索箇所である山向こうの市役所へ至る道は津波により寸断されており、民間の路線バスに乗り峠を迂回して市役所前に着きました。

我々が搜索する箇所は津波の終着地点のようで瓦礫や車が押し寄せて家の中に入り込んでおり道路も瓦礫の山の状態でした。瓦礫を手でどけつつ生存者を搜索中、現地住民の方が、「あそこの家のおばあさんが避難所にも来てない」と言われ搜索を継続しました。

搜索途中、津波警報が出たので、高台にある津波避難所へ避難したのですが、津波避難所から海まではかなりの距離があるのに高台の下まで津波が押し寄せていました。

この場所より後ろは避難所である小学校と通って来た道路しかなく市街地全てが津波により被害を受けたようです。

津波警報が解除されるまでの間、おばあさんと先ほどの住民の方としゃべっていたのですが、おばあさんは「私は子どもの頃、津波が来て母親におんぶされて逃げた。」と言っていました。ま



た、津波に流されこのあたりで引き波が来る前に助けられた人は、体がずぶ濡れでがたがたと震えていたと聞きました。避難中にも「いきてたんか」と泣きながら抱き合っているのを見ると被害の大きさを感じました。

津波警報が解除され、日没まで搜索を再開しましたが、残念ながら生存者は発見できず、釜石市を後にしました。

運動公園に帰ると、後方支援隊がテントと食事を準備してくれて、3泊目でやっと体を延ばした状態で寝る事が出来ました。

搜索2日目の大槌町の搜索担当区域は津波の引き波で何もない状態でした。夕方まで搜索を行いましたが、生存者は発見できませんでした。夕方に到着した交替の第6次派遣隊と対面し、活動の引継ぎの後、大槌町を引き揚げ、その夜に我々第1次派遣隊は岩手県を後にしました。

大阪への帰署途上、箕面市消防本部の所属職員から託された思いや岩手県の現地へ至るまでの懸命な道路復旧、案内、食料の提供など多くの方からの支援を受けたことを思いながら、自分達のできることは全力を尽くしたと自分自身に言い聞かせ、第6次派遣隊の無事を祈願しました。また、派遣された隊員は言葉少なく、流れる車窓を見て、震災の驚異を現実として受け止めるとともに、被害を受けたすべての方々が一日でも早く復興して、震災前のあたりまえの生活を取り戻すことを願っていたと思います。

今後、あつてほしくないことですが再度、派遣される事があれば、今回の経験を生かし箕面市の消火隊、救急隊のみでなく大阪府隊との連携を強化すべく努力し、緊急消防援助隊として最大限の力を発揮できるよう日々の訓練等に励む所存です。それが私に課せられた使命だと思います。

職員手記

消防本部 宮原 将樹 (緊急消防援助隊第1次派遣 任務：消火隊)

私は3月11日に発生しました東日本大震災の緊急消防援助隊1次隊として岩手県に派遣されました。

発生当時、私は勤務中でしたが緊急地震速報が流れ職場のテレビがつけられ吸い込まれるように見ていると東北地方が津波で悲惨な事になっていました。そして第1次隊の派遣が決まり、私はその隊員として行くことになりました。決まったときは恐怖心や不安というよりも一人でも多くの人を助けようという気持ちでいっぱいでした。それから緊急消防援助隊の消防隊員としていくからには少しでも被災者方の役に立ちたいという思いがありました。

出発し、移動中のテレビやラジオでは地震や津波のことばかりで緊張感がありました。そして、近づくにつれ地面がひび割れていたり、建物の屋根が崩れ落ちていたり、停電していたりとさらに緊張感が増していきました。

実際に岩手県に到着したのは1日半後でした。岩手県に入り、活動現場まで向かっている途中、被災者の方々が消防車や救急車を見て手を振ってくださったり、おじぎをしてくださっている姿を見て、今、被災者の方々を救えるのは私たちしかない、全力で臨もうと思いました。

そして、現場に到着し最初に見たときはテレビで見たような津波が本当に来たんだと圧倒されました。建物のほとんどが倒壊し、車



は流され、町は形を失っていました。活動も大量のがれき等があり思うように進みませんでした。

翌日は、大槌町へ向かいました。

大槌町は前日に活動した釜石市とは違い津波で全部流されてしまいほとんど何もなく想像していたよりもひどい状態でした。私はその現場を見たときまるで別世界のように感じました。そんな中活動をしましたが、人を助けることはでき



ず悔しい思いが残りました。2日間の活動でしたが一人も救うことはできず人命救助の大変さ、難しさを改めて思い知らされました。

私は消防職員として経験は浅いですが、この東日本大震災の緊急消防援助隊として派遣され、私にとってとても良い経験ができ、そしてとても多くのことを学びました。いずれ、日本で東南海・南海地震という大地震が発生するといわれていますが、その時にはここで経験したこと、学んだことを無駄にせず、一人でも多くの命を救いたいと思います。そして、これから先、後輩として入ってくる消防職員に3月11日に起こった東日本大震災のことを伝えていきたいです。

職員手記

消防本部 林下 幸祐 (緊急消防援助隊第2次派遣 任務：救急隊)

“あの日”私は、出勤のためいつもどおりに身支度をし、翌日の予定を家族に話しながら家を出ました。その時は、何事もなく帰宅出来ることを信じていました。

“あの日”の午前中は訓練を行い、午後からは、救急隊の機関員（運転手）として業務につきました。午前から休むことなく業務をしていましたので、病院を引き上げる際に「今日は、早めに食事をすまそう。」などと隊員同士で話しあっていた矢先に、隊員が所持している携帯電話で「緊急地震速報」をけたたましい音とともに受信しました。救急車を運転中で揺れも感じなかったのに、特に気にすることもなく消防署に戻りましたが、通信指令室のモニターに映し出された映像を見て、現実には起こっていることなのか判断できませんでした。

その時から、署内の雰囲気は慌ただしくなっており、自身も緊急消防援助隊の派遣隊員に選ばれ出場するまでの時間は、今まで味わった事がないような緊張感を覚えました。

集合場所の万博公園東口駐車場に到着した時には、府下から集まった多数の消防車や救急車が到着しており、午後10時30分、行き先が東京方面というだけで約30台の消防車両が隊列を組んで出発し、名神高速道路から東名高速道路に入り午前3時頃、浜名湖SAに到着、極度の緊張と興奮で全く疲れや眠気を感じず、ひたすら高速道路を東へ走りました。その間も、ラジオからは“陸前高田市が壊滅状態”や“仙台市の砂浜に百体以上の遺体”等のニュースが流れ、被災地の状況が想像出来ない状態で運転をしていました。

12日正午、昼食休憩のため入った神奈川県足柄SAで、大阪府隊の活動地が岩手県に決定すると、早く被災地に入って活動したい気持ちとは逆に、東北自動車道は地震で道路が地割れしており速度を落とさざるをえず、野営地の遠野運動公園に到着したのは、出発して約30時間後の午前3時になっていました。

それから、数時間、救急車内で仮眠をとりましたが、極度の疲労感と睡魔が襲い狭い車内で意識が無くなるように眠りました。

活動地の釜石市に入ったのは午前7時頃で、本隊は小佐野出張所での救急活動を命じられ、釜石市鶴住居地区へ救急出場しましたが、その時に初めて見た被災地の光景は一生忘れることはできないと思います。全ての家屋は押し流され団地の3階部分まで浸水した形跡があり、敷地と道路の境もなくなり、どこをどう走ったらいいかわからない状況になっていました。



結果的に救急活動は、この1件だけに終わりましたが待機中に他隊から続々と入る無線は、ご遺体発見の内容ばかりで絶望的な気分になりました。

しかし、比較的被害が少ない場所では、地元住民の方が協力して片づけをされていたり、停電で信号が機能していなくとも緊急車両を優先してもらったり、被災地からの引き揚げ時、長い車列に向かって手を振ってもらったりしている姿を見ると、町に秩序と活気があるように思えました。

わずか2日だけの活動で交代することになり、被災地のためにもっと活動をしたいと思っていましたが次の派遣隊員に思いを託し現地を引き揚げました。5日ぶりに家族の顔を見て、風呂に入り布団で体を伸ばした時、普段の何気ない生活に感謝するとともに被災地の方々に申し訳ない気持ちになりました。

最後に、今回の災害は未曾有の大災害になりましたが、幸いにも地元の方々は冷静に行動し、協力して困難を乗り越えようとされていました。私達援助隊が被災地で活動したのは、発災から2日目の朝になりました。釜石市や大槌町は救助活動や支援活動が手つかずの状態でしたが、地元の方々は、援助が届かなくても自分たちで出来るだけのことをされており、あらためて「自助」「共助」が重要であるということを身をもって知りました。

今回経験したことは、過去の思い出にするのではなく、“あの日”あったことを教訓に今後活かしていかなければならないと感じています。

職員手記

消防本部 稲尾 良明 (緊急消防援助隊第2次派遣 任務：救急隊)

私は、平成23年3月11日の地震発生時、西分署において近々消防署内で開催される警防技術錬成会に向けて訓練に励んでいました。安全管理のため、訓練棟の3階に上っていた先輩が下りてきて、「今さっき、立ちくらみがしたわ。」と言ってきたので、「年ですね。」などの冗談話をしていたところ、「地震が発生しました。訓練を中止してください。」との庁内放送が入りました。この時は、揺れを感じなかったし、自分には全く関係ないことだと軽視していました。

上司の指示により、西分署から本署に帰署した後、目に入ってきたのは、通信指令室にあるモニターに、車が津波に押し流されている映像でした。まるで、作り物のセットに置かれたミニカーが水に流されている映画のワンシーンを見ている様な非現実的なものに思われました。

続いて事務所に目を向けると、慌ただしい雰囲気になっており、「緊急消防援助隊に出動出来る車両台数の返答はどうします。」「出動人員はどうします。」などの話が飛び交っていました。そんな状況を目の当たりにしているのに、それでも自分は「夢を見ているんだ。」と自分に思い込ませ現実逃避していました。

夕方には、本署職員全員が事務所に集められ、緊急消防援助隊に出動する車両及び人員の発表があり、自分は救急隊での派遣が決まりました。この時、「やはり現実の出来事なんだ。」と自覚すると共に、モニターの映像を思い出し恐怖しました。

救急隊は、2次隊での出動となり、現時点では1次隊の出動命令しか出ていなかったもので、1次隊の出動準備をしつつ、心の中では「悲惨な現場には行きたくないな。」なんて弱気なことを考えていました。

1次隊が本署を出発する直前に、2次隊も派遣が決定しました。「出動が決まればやるしかない。」と覚悟を決めるも、「被災地で自分は何ができるんだろう。」と不安感に襲われました。

集合場所の万博公園東口駐車場に到着し、次々大阪府下の各所属の消防車両が集まって来るのを見ていると、「こんなに大勢の消防職員の中で、自分が足手まといになったらどうしよう。」と更に不安感が増幅していきました。

午後10時30分、行き先が東京方面に決まり30台近くの消防車両が隊列を組んで名神高速から東京方面に向け出発しました。暗闇の中、多数の消防車両が赤色灯を回しながら走るのを見ると、今までに見たことがないせいか異様な光景に見えました。



名神高速から東名高速、建設中の新東名高速、東北自動車道と乗り継ぎ、出発から2日後の13日午前3時30分頃に野営地である遠野運動公園に着きました。そのまま車中で3時間ほどの仮眠をとりました。もうこの頃には、「早く現場で役に立ちたい。」との思いが強くなっていました。

活動初日の13日は、本隊以外に4台の救急車が釜石市の小佐野出張所に詰めることになり、救急出場がかかるまで待機となりました。その待機中に、出張所近くに住むご老人が「わざわざ大阪から来てくれたの。遠いのにありがとうね。」と言葉をかけてくれました。その言葉で、更に役立ちたいとの思いが強まりました。

しばらくすると、釜石市鶴住居地区への救急出場要請が入りました。現場に着くまでに車両の窓から見えたのは、全ての家屋が押し流され、残っている団地の3階部分には浸水した形跡があり、地面は道路がはっきりしないほど泥で埋もれている衝撃的な光景で、津波の恐ろしさを知らされました。

この救急の内容については記述しませんが、私が被災地で行った救急活動はこの1件だけで終わりました。

二日目の14日は、大阪府隊の検索現場である大槌町に詰めました。車両を止めていた周辺は、海から離れている場所なのに、粉々になった家屋の瓦礫の

山となっていたり、川の中や高台の途中など意図的に止められない場所に車があつたりと、初日の鶴住居地区で見た津波の跡より更に悲惨な光景でした。瓦礫の山などをよく見ると、結婚式や家族旅行で撮ったと思われる写真が散乱していたり、遠くでは必死に瓦礫をかき分け遺族の遺留品を捜している姿も見えたりして、泣きそうになると同時に自然災害に対して怒りが込み上げて来ました。

この後、交代で被災地を引き揚げることになりました。引き揚げの際、停電で機能していない信号機のある交差点では緊急車両を優先に通行させてくれたり、長い隊列に手を振ってくれる住民の姿を見ていると、自分が役に立っていませんでしたので申し訳ない思いで仕方がありませんでした。

今回の緊急消防援助隊では、ほとんど何もすることが出来ませんでしたが、被災地で見聞きして感じた良いところは今後起こりえる東海、東南海、南海地震、その他の大規模災害時に活かそうと思いますし、今回の様に大規模災害時に弱気にならないため、今以上に心・技・体を養いつつ職務に精進していきます。

職員手記

消防本部 出口 哲 (緊急消防援助隊第2次派遣 任務：救急隊)

今回の災害で感じたことは、まず被災地である釜石市に緊急援助隊大阪府隊として現地に到着したときに、住宅が津波により流され、乗用車が横転して川にはまり、阪神淡路大震災を上回る被害であることに言葉を失うとともに、目を覆いたくなる惨状が飛び込み、これは今までに経験のない災害で、身が縮む思いでありました。

被災地に入り、自分には何が出来るのであろうかと自問自答し、この被災現場において何をすべきか途方に迷いましたが、同じ緊急援助隊大阪府隊として派遣された仲間との連携を強固にしていき、指揮隊長の命で統率ある行動が出来たことは、今後の所属の消防活動及び大規模災害の活動に参考になりました。

また、被災地の人々からは、歓迎の拍手や「頑張って下さい」との激励の言葉をかけてもらい、大阪府隊として何十時間も走行して現地に入



って行き、今後の活動方針の見通しもたたないなか、当初は不安と何をすればいいかがわからず戸惑うことがありましたが、大阪府隊の仲間がいたことによって自分自身を奮いたたせ、指揮隊長の勇気ある判断・行動に勇気付けられ、自分が所属代表で緊急援助隊として選ばれたことに誇りを持ちました。

2日目に大槌町の被災地に現地入りしましたが、住民であろうと思われる人が、がれきをかき分け、必死に遺族の遺留品を捜している姿が印象的で、この被災地で自分達のできることを懸命に頑張ることが我々救急隊の任務であることを強く感じました。

また、現場には家族の写真等が散乱しており、ここには小さなお子さんのい

る家族が住んでいた様子が伺われ、何ともいえない感情が出てきました。今、現にこうして被災地で活動できることを、いかに感謝すべきことであるかを身にしみて実感し、とにかく希望を持って活動しようと思いました。

地震大国日本において、いつどこで自分自身の身に降り注いでくるかもわかりません。今回の一連の出来事は、「水・食物」、「資源・エネルギー」、「保証」を深く考えさせる出来事で、この未曾有の出来事で被害にあわれた方々には、励ます言葉も見当たらず、無力さを痛感しました。そして、被害にあわれた方々が元の生活に戻るには、検討も付かない状況だと思いますが、一日も早い復興を心から願ってやみません。

最後になりましたが、この貴重な経験を生かすため、後生に惨状のすべてを伝え、我々はいつくるかも分からない災害に正面から向き合い、仕事に邁進していきたいと思います。

職員手記

消防本部 黒河 博幸 (緊急消防援助隊第6次派遣 任務：消火隊)

東北地方太平洋沖地震の発生から二日後の平成23年3月13日、大阪府緊急消防援助隊第6次派遣隊として、岩手県大槌町に向け出発した。

被災地に向かう途中の東北自動車道に入ると、道路の亀裂、路肩の陥没等が目立ち始め被災地が近くなるにつれ徐々に景色が変わっていき、釜石市内を走行中に景色が一変した。建物は破壊され、道路に船や車が瓦礫の山になり、テレビ・新聞等で被害の甚大さは分かっていたはずなのに、一同驚愕したのを記憶している。16年前の阪神淡路大震災にも派遣されたが、津波による被害は想像を絶する凄惨な光景だった。

先発している大阪府隊と合流できたのは、翌日14日の夕方だった。明日からの活動に備え、現地での申し送り等を受けたが、隊員の真っ黒に汚れ憔悴しきった顔をみて活動の過酷さは察することができた。

次の日、中隊単位での人命検索活動が始まり、私の属する中隊は大規模な物販店舗の検索活動を行った。店舗の出入り口はすべて瓦礫で塞がれていたため、入れそうな開口部を確認しながら屋内進入した。店舗内も瓦礫の山だったが、特別な救助資機材は使用せず、とび口や弁慶などを使用しながら手作業により瓦礫



を除去し、「誰かいませんか、誰かいませんか」と声をかけながら検索活動を行ったが、自隊は残念ながら生存者の発見には至らなかった。

結局、大阪府隊の4日間の活動で生存者の発見・救出は1名に留まったが、大阪の比ではない積雪や凍結に加え検索現場は、段差や釘など散乱し、更には



余震等の二次災害の危険性のある悪条件下で、隊員は神経を張り巡らせての活動をしいられた。

またいつ終わるとも分からない活動であったため、隊員は身も心も疲弊したなかでの活動であったが、それを癒してくれたのは後方支援隊の献身的な活動であった。出場隊

員の全てが後方支援隊に感謝していることと思う。

3月18日の岩手県の復興宣言を受けて活動停止宣言が出され、明朝の11時に現場引き揚げ指示が出されたが、「もっと出来る。」「まだ、帰れない。」とその場にいた誰もが思ったと思う、野営地から被災地の大槌町までの片道50キロの道のり、消防車の車列を見れば通り過ぎるまで、沿道に出て来て頭を下げている被災者の方々の思いに応えられたかと、自問自答してみる。限られた時間の中、出来る限りの活動を実施したと、自分自身に無理矢理言い聞かせて荷物の整理をした。

我々消防職員は、常に助けられる側の気持ちを忘れてはいけない。そんなことを思いながら私の生活は、平常に戻っている。私が経験した岩手県での6日間を一生忘れることなく今後の消防活動に活かせることが、今回の震災で助けられなかった方々へのせめてもの償いだと思っている。亡くなられた方々に哀悼の意を表するとともに、被災地の早期の復興を願うばかりである。

職員手記

消防本部 後藤 実 (緊急消防援助隊第6次派遣 任務：消火隊)

私は、平成23年3月13日から20日までの間、緊急消防援助隊大阪府隊の消火隊として、岩手県の釜石市と大槌町へ出動しました。

私は、地震発生当日、自宅にてテレビ等の報道番組による大規模地震及び大津波による被害状況が確認できました。尋常でない状況と大津波の凄まじい破壊力を目の当たりにし恐怖を感じたことを覚えています。緊急消防援助隊の派遣要請について東北地方と遠方ですが可能性があるため、参集を考え自宅で待機しました。

次の日、12日に出勤すれば、すでに箕面市消防本部から二隊が派遣されたことを知り、早い対応に驚きました。「日本全国の消防隊」がこの災害に立ち向かう姿勢であると感じました。

13日の15時、万博公園駐車場に集合し緊急消防援助隊大阪府隊として出発。

目的地は「東北地方」と漠然的で、活動場所が山沿いか海辺かは不明でした。東北地方への道のりは遠く、大多数の隊行動であるため長時間の行程となりました。車中、テレビ等の報道番組での情景が思い出され、昼夜問わず活動するため、体力の温存と体調管理を第一に考えました。途上、ラジオやインターチェンジのテレビでは、想像を絶するような事態の報道が流れ、自分の体力と気持ちは耐えうるだろうかと不安でした。

14日、実際に釜石市に到着し町並みを見たとき、あまりの壮絶な光景に驚き、自然災害の被害の甚大さに驚きました。また、地震発生から何時間も経過しているのに、まだ手つかずの場所も多く、大多数の大阪府隊でも人員不足のように感じました。さらに、道路脇は、倒壊し流され幾重にも家屋や車などが積み重なっており、今までに見たことも経験したこともない状況でした。



そのまま大槌町まで行き、先陣隊と合流するも日没のためベースキャンプに引き揚げ、資器材及び個人装備品の整理を行いました。

余震が頻繁に発生する中、15日から18日まで大槌町で活動を行いました。活動内容は人命検索でした。大津波による被害が著しく、津波発生時間等を考慮して、生存の可能性が高い大型スーパーマーケット周辺及び内部の検索活動を行いました。

二次災害の危険性が常にあり非常に緊張した時間でした。瓦礫を手で除き、声をかけて生存者を捜しました。日ごとに活動範囲を広げ、時間が経つにつれ家屋や瓦礫にペイントされた「検索済み」の印が目立つようになり寂しさを感じたことを覚えています。



私たちの隊では、生存者を救出することはできませんでしたが、大阪府隊として1名の生存者を確保することができました。最後のベースキャンプでの報告の時、派遣隊員400人で喜ぶことができ、改めて団結感を感じました。緊急消防援助隊の派遣は、精神的にも体力的にも過酷でしたが、私自身「日本全国の消防隊」の一員になれたことを誇りに思います。

最後に、被災地での活動を考え心配してくれた職場の皆様、同派遣隊の皆様ありがとうございました。

職員手記

消防本部 広田 大造 (緊急消防援助隊第6次派遣 任務：消火隊)

被災地への派遣が決まった時は、被災地の助けになりたいと思うと同時に、今までにない経験と報道される状況や情報から予想のつかない現地の状況に対しての戸惑いが入り混じった気持ちだった。

被災地に到着した時、目の前にはテレビなどで報道されているそのままの光景が広がっており、辺り一面が瓦礫の山であると同時に周囲の山の斜面に炎が燦っており、その光景にどこから手をつければいいのだろうと感じた。



到着の翌日から要救助者の搜索活動に従事したが、瓦礫の傍らに立つと一段と被害の凄まじさを感じた。活動を行う中で、次々に要救助者が発見されていたが、残念ながら生存された状態ではなく、目にする光景からも生存者の発見は難しいかもしれないと感じてしまう状況だった。

しかし、そんな状況の中、奇跡的に高齢の女性の生存者が見つかったとの情報を耳にした時は、他にも同じような状況で生存している方がいるかもしれないと感じ、なんとか生存者を見つけたいと、活動に一層力が入った。

活動を行っていると、他市の隊の中に私が消防学校に派遣されていた際の教官や同期生の姿を見つけ、一緒に訓練を行ってきた仲間が同じ緊急消防援助隊として、被災地で活動している事に心強さを感じた。搜索活動を行った夜、教官の元に挨拶に行くと他の同期の隊員も自然と集まってきて、それぞれの活動の事などを話した。

その時、教官がその日の活動内容を話してくれた。教官が「要救助者がいる。」

」との情報を得て、現場に捜索に向かうと、そこには一台の乗用車があったそう
うだ。車両の中には要救助者の姿があったが、残念ながら既に亡くなっており、
状況から恐らく親子だろうということだった。

そのご遺体の発見された状況は、運転席のご遺体がシートを倒し、後部座席
の子供をかばうようにして亡くなっていたそうで、自然とその時の状況やその
行動はどんな想いでとられたものだったのかと考えた。

親ごさんと思われるその方は、津波から逃げきれず、それでもなんとかわが
子だけでも助けたいとその行動をとったのかもしれないし、死を覚悟してお子
さんを抱き寄せようとしたのかもしれない、と教官は言われていた。

死に直面したその状況を考えた時、まだ小さいお子さんがどれだけ怖かった
だろうか、そして、その状況の中でそれでもお子さんの事を想ってとられたの
だろう、その方の最後の行動、その方の想いと無念さを思うと、悲しさがこみ
上げてきた。その活動の話は耳に残り、今でもはっきり記憶に残っている。

この様な状況がいたるところであの震災の時に起こり、誰にも伝えられない
たくさんの無念と悲しみがあったのだと思う。活動の中でその内の一つを耳に
し、私は改めて亡くなられた被災者の方と被害の事を考えた。



緊急援助隊として私は、被災地の役に立つことが出来なかったと感じている。派遣されなかった消防職員も多くの方が、被災地の力になりたいと強く派遣を希望していた。そして、消防職員以外にも同じ想いを持っていた方は大勢いたと思う。たくさんの方が一人でも多くの人を助けたいという想いを持っていたが、それでも助けられなかった多くの方が亡くなってしまった。

災害は何の前触れもなく突然に襲ってくるし、どうしても防ぎきれない状況があるのも確かだと思う。しかし、このような大きな災害を経験し、その経験をもとにして防ぐ事が可能な被害もたくさんあるはずだ。今回の経験を無駄にせず今後活かすためにも、被害や被災者を少しでも減らせるよう、私達一人一人が災害に対して考え、行動をとらなければならない。

職員手記

消防本部 西川 順喜 (緊急消防援助隊第6次派遣 任務：消火隊)

私は、震災2日後の平成23年3月13日から20日までの間、緊急消防援助隊大阪府隊の消火隊として、岩手県の釜石市と大槌町へ出動しました。

私は震災があった日は非番日で、自宅で休息をしており、ふとテレビを付けた時、仙台空港が津波に襲われている衝撃的な映像が目に入ってきました。「日本で何が起きたのか。」と一瞬目を疑いましたが、すぐにテレビから次々と映し出される悲惨な映像で理解をしました。

そして、この大規模災害ならば、間違いなく緊急消防援助隊の招集がかかるかもしれないと直ぐに思いました。震災後、職場からの連絡もないため、職場も慌ただしくなっているだろうと思い連絡を待ちつつ、テレビ等の報道番組で被災状況を確認していました。

震災当日は職場からの連絡はなく、翌日12日に出勤すると、職員8名が緊急消防援助隊大阪府隊として出動していた事を知らされました。

職場は思っていた通り慌ただしく、通常の箕面市での災害、救急の対応はもちろん、一次隊からの情報整理等に追われている中、二次隊の編成も同時並行で進んでいました。そして、二次隊のメンバーが発表され私の名前があった時は、一人でも多くの人を助けたいという気持ちと、テレビ等で報道されている悲惨な現場に行くという恐怖や不安の気持ちが入り交じっていました。

そして13日、緊急消防援助隊大阪府隊が向かう東北地方までの道のりは遠く、現場での活動は過酷で長時間を予想されていたため、体調を万全にしておかないといけないと思い行動していました。

釜石市に入り景色が急に変わり、周りの建物は津波により破壊され、車や船、瓦礫があちらこちらにあり、それはもう想像以上の光景でした。その一方で消防車が通る度、被災地の方々が深々とお辞儀をしたり、手を振ったりする姿を見ると、「頑張らなくては。」という思いがわき上がりました。

実際に活動を開始すると、人命検索は想像以上に過酷で瓦礫でうまく進むことも出来なければ、要救助者を捜す事にも障害になりました。大雪による悪天候が続いたため、二日間しか現場で活動する事が出来ず、また生存者を捜し出す事が出来なかったのが非常に悔しい思いをしました。岩手県が復興宣言し、



緊急消防援助隊が解散になった際、誰もが「まだ活動出来る。」と思っていたのではない。まだまだやりきれない思いを胸に岩手県を後にしました。

今回の東日本大震災の写真や映像は数々あると思いますが、私は写真や映像では伝えられない事を自分の目で見てきました。これから次々と入ってくる後輩職員にもその事を伝えていけたらと思っています。そして、緊急消防援助隊での経験をこれからの消防人生で大切にしていきたいです。

職員手記

消防本部 松浦 光洋 (緊急消防援助隊第6次派遣 任務：消火隊)

私は東日本大震災発生時、1週間後に署内対抗で行う予定であった警防技術錬成会の訓練に励んでいました。地震発生から約45分を経過した頃、ある上司から「東北地方が地震と津波で大変なことになっている。」と聞かされ、すぐにテレビを見ました。その時、テレビから流れる被災地の映像を見た瞬間、「これはただごとではない。緊急消防援助隊の現在の決まりでは、大阪部隊の派遣範囲は東京までとなっているが、これは出動命令がかかる。」と思い、訓練は即座に中止して、私は非番日であったことから自宅に帰り待機しました。

その間、たくさんの後輩から「出動命令はかからないのですか？いつでも出動できる準備はしておきますので何か情報が入れば連絡してください。」との内容のメールをもらい、後輩の大災害に対する危機管理能力の高さに勇ましさと同じ共感であることに嬉しさを覚えました。結局、その夜には出動命令はかからず、上司から1次隊が出発したことを聞かされました。

翌日、出勤すると「2次隊（6次隊）の小隊長として明日出発して下さい。」との命を上司から受け、翌日の13日、15時に大阪万博から岩手県釜石市に向け出動しました。

現地には、翌日の夕方に到着し19日まで滞在したのですが、大雪のための天候不良が何日もあり、実際の活動は15日と17日の2日間だけとなりました。



箕面隊は両日とも人命検索に当たりましたが、17日の人命検索では私は中隊長を命ぜられ、現地の大槌消防署の消防職員1名と所属の違う約50名の隊員とともに活動をしました。

その際、広範囲な現場であったことから前線指揮所を設定し、私はそこから

指揮をしたのですが、地理等の情報提供を受けるため大槌消防職員の方とずっと一緒に居ました。現場は悲惨なほど壊滅状態でしたが、津波が到達した時間帯に町人がたくさん集まっていたと予想される場所を教えてもらいながら、その場所を中心に人命検索を進めました。また、津波被害にあった大槌町役場や大槌消防署も教えてもらいました。

その時です。その方が突然涙ぐみ、「私の家も消防署の近くにあったのです。家族の安否も未だわかりません。私は大津波が来たとき消防車で山へ逃げたのですが、車を降りた瞬間に車は津波に飲み込まれ炎上したんです。今の私は行く場所がなく、昼間は毎日現場に来ているんです。これからこの町も私もどうなるのでしょうか。」と私に訴えてきました。それを聞いてからは、私も涙が止まらなくなり、本当に辛くて悲しくて言葉もでませんでした。

こうした中、その方の助言もあり最終的に要救助者数名を発見することができました。そして、薄暗くなり雪が舞い始めた頃、お互いが涙を目に浮かべ握手をして別れました。

私の涙は「くじけずに頑張ってください。」との意味であったのですが、その方の涙には計り知れない程の深い意味が込められていると思います。私はいつになるかは分かりませんが、この町をもう一度訪れその方に再会したいと思っています。

職員手記

消防本部 依田 崇 (緊急消防援助隊第6次派遣 任務：救急隊)

東日本大震災が起こったのが、平成23年3月11日。そして、私が緊急消防援助隊の一員として被災地へ派遣されたのが、二日後の平成23年3月13日第6次派遣隊（箕面消防としては第2陣）としてであった。

平成24年2月の今、こうして手記を書く機会をいただき、当時のことを思い返してみると、まず驚かされるのが、既に1年が過ぎようとしていることである。この未曾有の大災害は、現在も進行形であり、とてもそんな時間が過ぎたようには感じられないからだ。確かに、思い出せない内容もあるが、被災地で見た情景は、私の中で未だ鮮明であり、また、その光景を思い浮かべると同時に表現し難い感情が滲みでてくる。こういった、未整理であった部分を整理する意味でも、順を追って思い返してみる。

そもそも、今回の地震を初めて知ったのは、非番日に家でテレビを見ている時であった。恥ずかしながら、当時の揺れに関しては特に意識していなかったように思う。しかし、各局一斉に映し出される被災地の状況は、どれも切迫しており、港や街が破壊されていく様は不謹慎ながら、特撮映画のワンシーンの様に感じたのを覚えている。思えばその時から、現実を現実として捉えきれていなかったかもしれない。

次の日の朝出勤後直ぐに、箕面市の緊急消防援助隊第1陣は既に出発しており、自分は第2陣としてメンバーに入れていただいているのを聞いて、とても気分が高揚した。

災害現場で活躍する姿に憧れ、この仕事を選んだのもあり、今こそ全力を出す時ではないかと考えたからだ。出発は次の日であったので、その日は夕方に帰宅し身支度を整え、家族には心配をかけることになるが、頑張ってくことを伝え、準備万端に次の日を迎えた。

早朝、万博公園に大阪府隊は集合し、現地へ向け出発。箕面消防隊員は他所属の方々と共に高槻消防のバスに乗せてもらった。13日朝から出発し、現地の岩手県大槌町へ着いたのは14日の夕方頃、27時間の移動であった。その間すし詰め状態の車内で、正直不満を感じていたが、被災地の状況が目に見え

込んできた瞬間、自分がどこへ何をしに来たのかを思い出し、恥ずかしい気持ちになったのを覚えている。

その道中のことである、被災地入りして瓦礫の間の道路を走行中、突如車列は停車し、前方の車両がご遺体を発見した旨の無線を発報していた。このことがあったので、私はこの緊急援助隊の活動中、もちろん生存者を発見するのが目標であるが、かなりの数のご遺体を見ることになるのだと覚悟した。



被災地での緊急消防援助隊の活動は安全面も考慮し、基本は日の出から日没までである。

したがって、被災地入りした14日は第1陣との交代とそれに伴う申し送りのみで、実活動を開始したのは15日からであった。

この時点で発災日より既に4日が経過しており、えも云われぬ焦燥感が全体に感じられた。特に私は、救急隊として派遣されていたので、はじめは救急車内でひたすら救助者を待つという仕事を与えられていた。これも大部隊が組織として動く以上、とても重要な仕事である。そう分かっていながらも、内心もどかしさで終始落ち着いてはいられなかった。

実際災害現場の情景は悲惨なもので、道路は自衛隊による復旧のおかげでなんとかその体裁は保ってはいるものの、街並みは大型の店舗や工場が辛うじてそこに建っているが、他はあるべき場所にあるモノは一切なかった。



かんしゃくを起こした子供が両手で積み木をぐしゃぐしゃにかき回した様に、元ある姿が全く想像できない状態である。さらに、手付かずの山火事による煙があちこちから立ち上がっており、あたり一帯に立ち込めていた。

あれだけ、大部隊に見えた大阪府隊の車列や隊員数も、破壊しつくされた被災地の中にあっては、物足りなさを感じてしまう程である。

その後、19日大阪府隊引き上げまでの救急隊としての主な業務は、被災しつつも基幹病院である県立釜石病院から他院への遠距離転院搬送業務であったが、結果としてご遺体と接触することはなく終えられた。

積雪のため全く活動できない日もあり、全体的に「思うような働きができていない」「もっともっと何かできるのではないか？」というような熱い気持ちと、それに比例するように、焦りやくすぶった雰囲気が充満していた。

そんな中、大阪府隊として1名女性を生存救出できた事は、本当に嬉しいことであり、経過時間的にも奇跡的であった。私自身、この報告にどれだけ心が救われたか分からない。

今回参加した隊員で全力を出していない者は一人もいないと思う。また消防職員として、計り得ない貴重な経験が出来たと思うが、大阪府隊として、輝かしい成果を残しそこに救いを感じつつも、正直私の中ではなんの達成感も得られなかった。

そのように感じている隊員は他にもいるのではないだろうか。理屈ではないかもしれないが、災害の規模があまりにも桁外れに巨大であり、また、自分には帰る家も待っている家族も居ながら、被災者を残し当時まだ復興の兆しのないまま被災地から引き上げなければならなかったからであろうか。

私にはまだまだ大きな目線で見える事はできていないが、緊急消防援助隊自体、阪神大震災の教訓により組織され、結果今回それが十分に活かされたのだと思う。私自身、今回得た経験を教訓にし、今後の消防人生に役立てて行きたいと思う。

職員手記

消防本部 山口 慶太郎 (緊急消防援助隊第6次派遣 任務：救急隊)

私は今回の地震に伴う緊急消防援助隊大阪府隊の一員として、一人でも多くの命を助けたいという気持ちから緊急消防援助隊への参加を志願し救急隊の交代要員として参加しました。

テレビでは東北は地震が起き津波で建物も何もかも流され、辺り一面水没している映像が映り、建物の屋上で取り残された人をヘリコプターで救出する光景が印象的でした。しかし実際に現地を見た時は、辺り一面建物も木々もすべて流され、土手の上に船が打ち上げられており、想像以上の惨状でした。野营地のある遠野市から検索活動を行う大槌町までの道のりでは、消防隊・救助隊・救急隊が車列を組み走りました。道行く人が皆、長い車列に向かい深々と頭を下げる姿を見た時は本当に心苦しく、絶対に助けるぞという思いの反面、この惨状の中で、いったい私達に何ができるのだろうか、できることがあるのだろうかという不安や無力感も感じながら、活動現場へ向かいました。

実際の搜索活動は想像以上に困難でした。津波は建物も人も何もかもを流してしまい、救助隊・消防隊の器材も役に立たず、結果として人の手で瓦礫をかき分け土砂を掘っての搜索活動となりました。そして要救助者の救出はあるものの、大多数の発見には至りませんでした。

私は救急隊として現地へ行きましたが、当初の主な任務は『待機』でした。生存者の救出があった場合に、病院までの搬送を担うため搜索活動現場近くに列を作り待機していましたが、救急車の中で、「一人でも多くの命を救うために来たのに、なぜこの待機時間に搜索させてくれないのか。」と、とても悔しさ・はがゆさを感じる待機でした。



その後、地元病院の耐震強度の低下により、入院患者の転院搬送で数件の救急搬送を行いました。搬送した患者も同乗した医師も皆被災し、家が流され運良く入院していたから助かった人もいました。それにも関わらず、明るく振る舞い、大阪から来たことや、救急車で転院することに「ありがとう」と言われた時は、辛かったです。

緊急消防援助隊として東北へ行ったことで「大変だったね。」とねぎらいの言葉をいただくこともあります。消防職員の一人として現地に行き結局何もできなかったという無力感・悔しさが一番辛かったです。それは私だけではなく大阪府隊として参加していた皆が同じ気持ちであったと思います。私は救急隊として現地に行き、転院搬送という任務で被災された方に直接接することができたことは貴重な経験でした。要救助者を捜索しに行けないことを悔しいとも思いましたが、被災地での救急隊のできることとして少しは貢献できたのかなと思います。

今後も大地震が起こる可能性が高いと言われていますが、災害時のさらなる被害の軽減を考え、日常の災害に対しても、あの悔しい気持ちを忘れず訓練を行っていきたいと思います。

職員手記

消防本部 黒木 達明 (緊急消防援助隊第6次派遣 任務：救急隊)

私は、平成23年3月13日から3月20日までの間、緊急消防援助隊大阪府隊の救急隊として、岩手県の釜石市と大槌町へ派遣されました。

地震発生当初から「もしかしたら被災地に派遣されるのではないかと」心構えはしていたのですが、いざ自分が被災地に行くとなると、色々な事を考えるようになり、不安な気持ちになったのも事実です。しかし、家族の支えもあり、前向きな気持ちで被災地に出発することが出来ました。

被災地までの道中は、出発してからしばらくの間は普段と景色は変わらなかったのですが、東北地方に入った辺りから高速道路も緊急自動車しか通っておらず、段々と被災地が近づいてきているのを感じました。

実際に被災地である釜石市の現状をバス車中から見たときには、正直驚きました。テレビなどで報道されている被害状況はほんの一部であり、地震による津波の恐ろしさを肌で感じ、その時に初めて恐怖を感じました。

バスはそのまま進み、第一陣が活動している大槌町に到着しました。大槌町の被害も甚大で、到着してからすぐにでも捜索活動に加わりたかったのですが、日没が近いこともあり、その日はベースキャンプに戻り先遣隊と交替して終わりました。

翌日から救急隊として活動したのですが、ベースキャンプから大槌町の活動現場へ向かう途中、釜石市の住民の方々が我々の隊列に向かい手を合わされていました。その姿を見たときに私はできる限りのことをして帰らなければここまで来た意味がない、精一杯の活動をしなれば、と心の中で思いました。



到着と同時に消火隊は搜索活動に加わり活動を開始しました。一方救急隊はほとんどの時間が待機で、「救急隊として早く活動したい」と強く思っていたのですが、今思えばもっと積極的に指揮本部に対しこちらから、避難所などへの巡回等を具申するべきであったと反省しています。

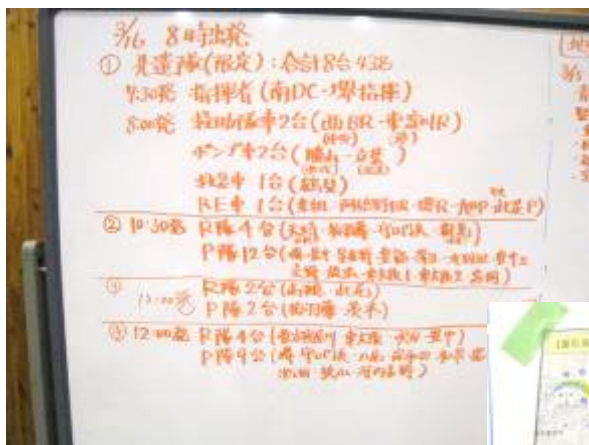
計4日間の活動で、県立釜石病院から遠方の病院への転院搬送がメインの活動となり、計3件の出場となりましたが、少しでも被災者の方々の役に立ちたいという思いだけで活動しました。

今思えば私個人としては大した活動が出来なかったと反省もあるのですが、緊急消防援助隊大阪府隊として派遣されたこの経験を、今後の消防人生に活かしていけたらと思います。

【参考写真】

ベースキャンプのようす





(両面印刷用調整白紙)

2. 避難所支援・給水支援

Contents

箕面広報課取材 「箕面市職員が被災地支援に出発！」

現地からの職員レポート

総務部 小林誠一／市民部 松本宜之 （任務：避難所支援）

派遣報告書

総務部 小林 誠一 （任務：避難所支援）

市民部 松本 宜之 （任務：避難所支援）

職員手記

市民部 松本 宜之 （任務：避難所支援）

現地からの職員レポート

市長政策室 岡本秀／みどりまちづくり部 田中幸雄 （任務：避難所支援）

派遣報告書

上下水道局 山本 貴行（任務：応急給水支援）

現地からの職員レポート

上下水道局 （任務：応急給水支援）

職員手記

上下水道局 山本 貴行 （任務：応急給水支援）

上下水道局 江口 朝日光 （任務：応急給水支援）

上下水道局 白井 康昭 （任務：応急給水支援）

上下水道局 江口 善浩 （任務：応急給水支援）

箕面市職員が被災地支援に出発！（2011/03/26 撮れたて箕面ブログ掲載）

箕面広報課取材

3月26日（土曜日）、箕面市職員2人が他の大阪府内の自治体職員20人とともに、東北地方太平洋沖地震の被災地である岩手県へ向けて出発しました。

26日（土曜日）午後2時40分から、大阪府市町村会館で、「岩手県への派遣職員出発式」が行われました。

今回派遣される職員は二手に分かれ、被害が甚大であった大槌町と陸前高田市に向かいます（箕面市職員2人は大槌町に）。

現地では、遺体収容班、避難所対応班、食料物資班、埋火葬班などに分かれ、遺体安置所（体育館）で、身元確認にきた人の応対、棺を運ぶ際の手伝い、体育館内の掃除、遺体の数確認などを行います。



出発式には、派遣職員22人のほか、倉田市長ら各自治体の首長も出席し、橋下大阪府知事らから派遣職員に激励の言葉がかけられました。



式の終了後、橋下大阪府知事や倉田市長らが見送る中、派遣職員を乗せたバスは、岩手県へ向けて出発しました。

箕面市では、今後も引き続き職員を派遣していく予定です。

現地からの職員レポート（2011/03/30 撮れたて箕面ブログ掲載）
--

総務部 小林誠一／市民部 松本宜之 （任務：避難所支援）

箕面市では、箕面市職員 2 人が他の大阪府内の自治体職員とともに、東北地方太平洋沖地震の被災地である岩手県大槌町に派遣されています。その職員から現地レポートが届きましたので、お伝えします。

3 月 27 日に岩手県大槌町に派遣されて、はや 3 日が経ちました。何度となくテレビや新聞で大槌町の光景は観ていましたが、実際に目の当たりにすると、言葉で説明出来ない程、想像を絶するものでした。辺り一面瓦礫の山で、役場や消防庁舎をはじめ、市街地の家屋は全て倒壊し町の機能が完全に破壊されている状況です。



私たち箕面市の職員は、岸和田市の職員とともに、避難所対応班のお手伝いをしています。午前中は、自衛隊の方と一緒に物資の搬出入を行っています。

午後から町内の避難所に県や町、企業からのお知らせ物を配布し説明を行い

ます。また、避難所生活での困り事や要望などを伺い、出来る限りの対応を行います。大槌町の避難所では、衣・食は比較的充実してきています。お風呂も自衛隊により週1回用意されます。

しかし、一時避難に伴う子どもの学校のことや仮設住宅の入居、再就職などの相談が多く、被災されたかたは今後の生活を再建するうえでの不安を強く抱いておられます。行政としては、これらの不安を少しでも解消できるよう、きめ細かな支援策を迅速に取りまとめ、発信していくことが必要であると感じました。



(上) 物資の搬出入のようす



(右) 大槌町の広報紙を作成しているようす



私たちの食事です。毎食これを食べています



今日の午前中はパソコンで避難者名簿の作成をしています

また、大槌町は3分の1の職員が死亡もしくは行方不明になっており、通常業務が完全にストップしている状態です。一刻も早く通常業務を復活させるためにも、私たち自治体からの支援は、お手伝い型ではなく窓口課業務などのセクションをまるごと請け負うなど大槌町職員のかたの負担を大幅に軽減させ、復興計画などに集中してもらうことが大事だと感じました。

そのためには、4日間という短い期間では、直ぐに引き継ぎが起こり、大槌町職員も業務に集中できないため、もう少し長い期間での派遣支援が必要であると思います。30日には次の部隊が来ます。今、感じたことは、岩手県や大槌町さらには次の部隊にも、しっかり伝えて1日も早く行政機能が回復するようお願いしています。

派遣報告書

総務部 小林 誠一 (任務：避難所支援)

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 3 月 26 日～平成 23 年 3 月 31 日

1. 応援職員

所 属	氏 名	担当業務
大阪府	市町村課	城間 正樹
豊中市	消防本部予防課	井上 裕貴
吹田市	地球環境課	伊勢田 直道
	体育振興室	坂元 宏基
茨木市	広報広聴課	武部 伸彦
箕面市	収納整理担当	松本 宜之
	しごと改革推進担当	小林 誠一
岸和田市	保育課	東 久義
	生活福祉課	大田 和史
守口市	危機管理準備室	藤田 将司
	産業労働課	中村 英樹
合 計	11 名	

※埋火葬受付班は岩手県の市町村が対応

2. 日程

26日(土)	13:00 箕面市役所・・・14:00 大阪府庁・・・14:40 出発式・・・15:00 出発 ・・・(名神高速・北陸道・磐越道・東北道・釜石道)
27日(日)	11:30 岩手県釜石合同庁舎・・・(打ち合わせ)・・・14:00 大槌町・・・ (打ち合わせ・避難所業務)・・・19:30 岩手県釜石合同庁舎・・・ 19:45 リーダーミーティング・・・21:30 終了(就寝)
28日(月)	7:30 岩手県釜石合同庁舎・・・8:00 大槌町・・・(物資搬出入・避難所業務) 19:00 岩手県釜石合同庁舎・・・(リーダーミーティング)・・・ 20:15 終了(就寝)
29日(火)	7:15 岩手県釜石合同庁舎・・・7:45 大槌町・・・(物資搬出入・避難所業務) 19:30 岩手県釜石合同庁舎・・・(リーダーミーティング)・・・ 21:30 終了(就寝)

30 日（水）	7:15 岩手県釜石合同庁舎・・・7:45 大槌町・・・（広報誌印刷・名簿入力業務）・・・15:30 岩手県釜石合同庁舎・・・（釜石道・東北道・磐越道・北陸道・名神高速）
31 日（木）	10:00 大阪府庁・・・（派遣報告会）・・・10:30 解散

3. 現地の状況

（1）岩手県釜石合同庁舎

- ・ライフラインは、携帯電話の電波状況も含めてすべて問題なし
- ・湯沸かし器使用可、シャワー室は輪番で使用可
- ・アルファ米、カップ麺、水、毛布、寝袋などは大阪府が用意しており、衣食住に問題はない

（2）大槌町

- ・役場庁舎、町内のガソリンスタンド、店舗を含め市街地は壊滅状態
- ・一面瓦礫の山で自衛隊が道路上の瓦礫を撤去
- ・近日中に小学校のグラウンドに仮設庁舎を建設予定

（3）大槌町中央公民館（災害対策本部）

- ・ライフラインは問題なし
- ・携帯電話はドコモ OK、au・ソフトバンクは場所によって使用可
- ・公用車は津波被害により使用不可（レンタカーを使用）

（4）町内避難所

- ・ライフラインは問題なし
- ・指定避難所の衣、食は比較的充実している
- ・在宅避難者の把握ができていないため、町として在宅避難者名簿を作成中
- ・山間の避難所については、携帯電話使用不可

4. 各班の業務内容

（1）食料物資班

- ・町指定避難所や在宅に避難されている方をエクセルで入力し名簿を作成
→食料物資等の管理、搬出入は自衛隊が中心となって業務遂行

（2）避難所対応班

- ・大槌町や岩手県、企業からのお知らせ文を39カ所の避難所に4班体制で配布し説明
- ・各避難所の要望を聞き、災害対策本部に伝達

(3) 遺体収容班

- ・収容されている遺体の身元確認のお手伝い

(4) 埋火葬受付班

- ・死亡届の受理、埋火葬許可証の交付
- ・土葬の説明

5. 各避難所での主な意見

- ・火葬場が一杯のため仮埋葬（土葬）するとのことであるが、身元不明者はどうするのか
- ・個人宅に避難している方の把握と支援物資を届けてほしい
- ・会社を解雇されたため医者に行きたくても社会保険が使用できない。国民健康保険証を早急にほしい
- ・自衛隊や県の医療チームが巡回に来たが昨日もバッティングした。事前に調整し効率的な巡回をしてほしい
- ・小中高の再開に向けた今後の方向性を教えてほしい
- ・県外への一時避難所の案内があるが、学校や仕事のことなど、詳細を提示されないと判断できない
- ・津波により浸水はしたが、かろうじて家が残っている方の衛生面の消毒は保健所が行ってくれるのか（案内がない）
- ・早急に仮設住宅を建設し入居させてほしい
- ・避難所の代表者をしているが、避難所の世話をしながら仕事勤めは厳しい。県や町から企業に対してボランティア休暇（有給扱い）の創設を要請してほしい
- ・ガソリンを確保してほしい

6. 感想

- ・何度となくテレビや新聞で大槌町の光景は観ていたが、実際に目の当たりにすると、言葉で説明出来ない程、想像を絶するものであった。
- ・辺り一面瓦礫の山で、役場や消防庁舎をはじめ、市街地の家屋は全て倒壊し町の機能が完全に破壊されている状況である。
- ・被災者は、一時避難に伴う子どもの学校のことや仮設住宅の入居、再就職などの相談が多く、被災されたかたは今後の生活を再建するうえでの不安

を強く抱いている。

- ・また、大槌町は約 3 分の 1 の職員が死亡もしくは行方不明になっており、通常業務が完全にストップしている状態であり、一刻も早く通常業務を復活させるためにも、私たち自治体からの支援は、お手伝い型ではなく窓口課業務などのセクションをまるごと請け負うなど大槌町職員のかたの負担を大幅に軽減させ、復興計画などに集中してもらうことが必要である。
- ・そのためには、4 日間という短い期間では、直ぐに引き継ぎが起こり、大槌町職員も業務に集中できないため、もう少し長い期間での派遣支援が必要である。

派遣報告書
市民部 松本 宜之 (任務：避難所支援)

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 3 月 26 日～平成 23 年 3 月 31 日

1. 支援業務内容

自衛隊の方との物資搬送業務及び被災自治体職員との避難所対応業務（人数確認・要望聴取・行政情報等の提供）を支援するとともに、最終日に在宅避難者名簿の作成に着手しました。

2. 支援業務を通じての感想

被災現場に身を置き、被災者と接することにより「人の命とは」「市民生活とは」「行政とは」改めて考えさせられました。

また、士気の高い大阪支援隊、自衛隊及び被災自治体の職員と協働することにより、職務に対する姿勢について再考するきっかけとなりました。

3. 今後の復興支援業務への提言

被災地における行政機能は、深刻な状況であることから短期的、断片的支援では十分ではなく、組織的に長期にわたり、被災自治体の早期復興に向けた人的支援が必要不可欠であると思います。

職員手記

市民部 松本 宜之 (任務：避難所支援)

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 3 月 26 日～平成 23 年 3 月 31 日

昨年の 3 月 11 日に発生した未曾有の被害をもたらした東日本大震災からもうすぐ 1 年が経とうとしています。災害派遣として岩手県大槌町に赴いた時のことは、少しずつ記憶が薄らいできたような気がします。

発生直後から連日、津波が押し寄せ、無残にも建物や車が流されるシーンがテレビに映しだされ、自然の驚異を改めて感じさせられていました。

ちょうどその頃、職場から緊急連絡として災害派遣の志願者募集の連絡が入り、正直なところかなり悩んだことを覚えています。そして翌朝、志願のメールを送り、数日後に自分が選出されたことに誇らしく思える半面、とまどいがあったことも。

また、その頃は、被災地に行ってどんな仕事をするのか、どんな生活になるのか、自分に何ができるのか、全く分からない状況で、出発までの 2 週間はとても不安な気持ちでした。

「どうなるか分からない」という心理は、被災者の方々が日々感じられていると思いますが、かなりストレスになることを実感しました。

今後の支援内容、復興計画、生活、仕事、住居、将来、放射能の影響等々、「どうなるか分からない」これはかなり辛いことだと思います。行政として被災者の方が少しでも安心できるよう、できるだけ早く明るい展望を示していくことが大事なことだと思います。

被災地に向け出発する当日朝には、気持ちの整理もつき「できるだけのことを」と冷静に思っていました。

市役所まで荷物を取りに来た後、市長が大阪 1 次派遣隊の出発地である大阪府庁まで見送りに同行していただき、また、知事からも「公務員にしか出来ない仕事だから」との激励をいただくなど、かなりハードな仕事になりそうな予

感から緊張のピークに達していました。

一次派遣隊は、大槌町へ11名、陸前高田市へ11名の計22名の編成で、箕面市は大槌町でした。他市からの派遣職員は、私よりも若い20代から30代の方が多く、中には消防職の姿もあり更にプレッシャーを感じました。

正午過ぎ、方面ごとに2台のバスに分乗し、一路、大槌町に向け出発しました。途中、2時間おきに休憩をとりながら、日本海側を北上する経路で20時間以上の行程でした。車内ではほとんど寝ることはできませんでしたが、現地が近づくにつれ緊張と使命感？でテンションが上がり眠気は感じませんでした。被災地近くのサービスエリアでは、箕面市役所とプリントされた作業服を見てか、地元の方から声をかけていただき、おにぎりを1つ渡され「頑張ってください」って励まされました。

宿舎は、岩手県庁釜石支部の庁舎で、会議室の床で寝袋を敷いての生活でした。食事は乾燥米をお湯で戻すアルファ米という便利なお飯とカップ麺でした。あと、「大阪府のおいしい水」という水道水をボトルに入れた飲料水で派遣中は過ごしました。

庁舎に着くと岩手県庁の担当者から職務が発表され、箕面市と岸和田市は避難所対応班を担当することになりました。その他の職務は、食糧物資班、遺体収容班などがありました。そして岩手県職員から携帯電話、地図、腕章などを渡され、公用車に分乗し大槌町の臨時庁舎になっている公民館まで向かいました。

大槌町は、町の中心部のほぼ全てが津波被害を受け、官庁施設も含め壊滅状態で町長を含む町職員の3分の1が亡くなられた町でした。

公用車が大槌町に近づくと、テレビで見たあの光景が広がり、道路は自衛隊のトラックが慌しく走り、空にはヘリコプターが飛び、さながら戦場の様相でした。砂ぼこりの中、自衛隊の隊員が瓦礫の撤去作業を黙々とされていた姿が今でも心に残ります。

高台にある公民館は津波を逃れ、町の臨時庁舎、自衛隊の指揮所、避難所等を兼ねており、多くの人でいっぱいでした。駐車場には自衛隊の軍用車両が並び、迷彩服を着た隊員が行き来し、大きな声が飛び交うなど、非常事態を実感しました。

公民館の前からは被害を受けた市街地から海までが一望できました。そのたもとに誰かが供えただろう花束が置いてあり、多くの命が一瞬にして奪われ、瓦礫の下に多くのご遺体があることを思うと、感傷的な気持ちになりました。

初日は、地元職員との顔合わせや避難所対応班の業務レクチャーの後、地元職員とペアを組み、公用車で担当する避難所13箇所を回りました。各避難所は津波の被害を逃れた高台にある様々な施設が利用されており、その全てが被災者でいっぱいでした。

地震発生から2週間が経過している中で、入浴もできず、トイレの水も出ない状況だったので衛生面がとても気になりました。担当する避難所の中で規模が最も大きい弓道場を訪問した時、トイレの使用ルールが壁一面にマジックで書かれていました。このような状況下で集団生活を長期間する場合、かなり具体、詳細に様々なルールを決めておかなければ、トラブルの原因になることを感じました。

派遣期間中のスケジュールは、午前中自衛隊と共に全国各地から寄せられる救援物資の搬入や仕分け作業を行い、昼過ぎから避難所と在宅避難の情報があつたところを訪問しました。行政情報の提供・説明、避難者の異動の確認、要望事項の聴取・回答が主な業務でした。

どの避難所にも、しっかりしたリーダー的役割の方がおられたため、予想していたより円滑に業務が遂行できました。

一方で、ストレスがかなり溜まっている被災者の方も多く、また、腕章が「岩手県」となっていたこともあって、かなり厳しい苦情を受けたことも事実です。数人に囲まれ、感情的に苦情を捲くし立てられることもあり、その時は箕面市役所とプリントされた作業服を見てもらい、大阪から来ていることを話し、世間話で窮地を脱していました。

ただ、残念なことは、岩手県民には「みのお市」と言うと岐阜県「みの市」と勘違いされるなど、ほとんどの方が箕面市を知らないことでした。また、説明するにしても滝・紅葉・猿・柚子などの話をしても大阪イコール大都会というイメージから、あまりピンときていないようで、箕面市民で芸能人の話題などで盛り上げていました。

最終日には、地元職員から避難者名簿の作成を依頼され、公民館の視聴覚室

から使えそうなパソコン3台を移設し、事務所は地元職員の仮眠室を借りることになりました。住民情報等は役場にあったサーバーもすべてが津波に流されており、正規のデータはない状態だったので、私と岸和田市の職員2人は各避難所から提出された名簿と職員がバックアップしていたデータの両方を照合しながら作業を開始しました。

避難者の多くの方が避難所間を頻繁に異動しており、他県からの避難者や逆に他県へ避難しているケースなど、在宅避難者の把握も含め、かなり煩雑であることが分かりました。

フォームが完成し100件ほどのデータ入力が終わった時点で、大阪からの二次派遣隊が到着し、私たちの業務が終了しました。

最後に、災害派遣を通じて感じたことは、被災し支援される側も支援する側も皆「人」であり、相手の立場を理解し、思いやりの気持ちを持って行動することが絆を深め、円滑な支援活動の遂行に必要なことだと思いました。

現地からの職員レポート（2011/04/20 撮れたてブログ掲載）
--

市長政策室 岡本秀／みどりまちづくり部 田中幸雄 （任務：避難所支援）

派遣先：岩手県大槌町

派遣期間：平成 23 年 4 月 9 日～平成 23 年 4 月 16 日

4 月 9 日（土曜日）から 16 日（土曜日）までの 8 日間、岩手県大槌町の支援に派遣された箕面市職員 2 名の報告です。

3 月 30 日（木曜日）の「現地レポート」でも現地の惨状は報告されていますが、その場に実際に立つと、胸が締め付けられる痛みを感じます。大槌町の場合、地震の被害もあったのですが、それを覆い隠してしまうほど津波の被害がひどく、3 月 11 日以前のまちの



様子を全く想像できません。また、わずかな高低差で、津波に襲われ建物が全くない地域と津波の難を逃れ全く以前と変わらないように見える地域に、明確に二分されていることが印象的でした。

瓦礫の撤去はまだまだ進んでおらず、埃などもひどいため、マスクが必需品でした。しかし、震災から 1 カ月が経過し、電気・水道などのライフラインや道路の復旧は着実に進んでいました。救命活動、支援物資の配送などの役割を担う、災害時における道路の重要性を特に再認識しました。





私たち箕面市の職員は、高槻市の職員とともにグループを組み、自宅や親族の家に避難している人たちの情報をデータ化し、地図に転記したほか、仮設住宅の希望調査票をデータ化し、ニーズの把握を行いました。

私たちは土地勘が全くありませんでしたので、住宅地図との「格闘」でし

た。また、町内を移動するときにも地図が欠かせず、いざという時のために、様々な縮尺の地図を用意し、共有する必要を感じました。

大槌町の避難所では、おおよそ衣・食は充実しているように見えました。しかし、あくまで「寒くない」や「食べ物がある」レベルですので、栄養が偏り、ビタミンやミネラルなどが不足しがちです。また、プライバシーも確保されていない状況が殆どです。気丈に振る舞われている被災者が多いのですが、心身ともに疲労が蓄積されているはずです。色々な課題もありますが、仮設住宅の建設など、早急に対応する必要があると思います。

また、自衛隊の働きの凄まじさには驚きました。冒頭に申し上げた「道」づくりにおいてもそうですし、物資の配送、入浴所の開設などの避難



所運営の支援も、非常に効率的で効果的に行われていました。避難所をはじめとして、被災地の多くの場所で自衛隊に対する信頼と感謝の声を聞きました。



（上）支援物資を保管する大テント



（右）自衛隊が開設した入浴所にて

私たちがいる間に、仮設の町役場が完成しました。色々なところから集まった不揃いの机や椅子を運び込みながら、大槌町の日も早い復興を願わずにおれませんでした。

住民票の発行も始まりました。しかし、もともとのおよそ三分の一の職員が亡くなったり行方不明であることから、住民票の発行や戸籍事務に精通した職員の数が不足しておられました。今後は、そういった窓口業務に従事した経験のある職員の派遣が必要であると思います。

いくら支援したいと熱い気持ちをもって現地入りしても、支援される側のニーズに応えられなければ、何の意味もありません。日々刻々と変化する現地の情報が迅速に集約され、支援する側と機動的にマッチングできる仕組みづくりが必要だと思います。



毎日、毎日、少しずつであっても復興への取り組みは進んでいます。

職員派遣においても、短期から中長期に切り替わり、じっくりと腰を据えた支援体制になりつつあります。支援する側も支援される側も頑張りすぎず、そして諦めることなく取り組むことが大事だと思います。

1週間という短期の派遣で私たちができたことは、本当にささやかなことでした。これからも大したことはできないと思います。しかし、それでも、引き続き復興のお手伝いをしていきたいと思っています。

派遣報告書

上下水道局 山本 貴行（任務：応急給水支援）

派遣先：岩手県大船渡市

派遣期間：平成 23 年 4 月 9 日～平成 23 年 4 月 16 日

- ・箕面市水道災害派遣第一陣として出発。
- ・4月9日（土）午後12時55分に新大阪駅から他市の派遣隊とともにバスで出発。
- ・翌4月10日（日）午前7時に基地となる盛岡市新庄浄水場に到着。
- ・午前7時10分からミーティング開始。事務局である豊中市から派遣先等の説明があった。箕面市は豊中市と2名2班体制で大船渡市の赤崎地区を担当することとなった。
- ・基地から乗用車で大船渡市に向けて出発。移動距離約120km、高速と一般道を使い所用時間約2時間であった。
- ・午前10：30に活動中の池田市部隊と合流。そのまま作業を開始し、午後12時20分に宿泊先である民宿に到着。
- ・池田市から活動内容の説明を受けながら昼食をとった。
- ・我が班は、赤崎地区の合同避難所1箇所、山間の集落2箇所を担当することになった。

- ・活動内容は午前と午後に1回ずつ、給水車及び移動用乗用車の2台で出動し、給水車で広報を流しつつ、運転者以外は徒歩にて車に併走し、家から出てこられる被災住民の方が持参する灯油缶、ペット



ボトル、漬物用樽、鍋、ヤカン等に給水車から水を入れ、手渡しで水をお渡しするという形式だった。

- ・被災住民の方によって、持参される容器は多種多様で、数も2個というところもあれば、ペットボトル100本持ってこられる方もおり、それに1本ずつ水を入れては手渡しという作業内容で、急傾斜の坂道などもあり肉体的にかなりきつい作業であった。
- ・給水車の水が無くなった時点で、その旨広報し、給水拠点まで給水車で向かい、活動場所まで戻ってくるという反復作業であった。休憩が取れるのはその間の約20分程度だけであった。だいたいであるが、午前2回、午後2～3回給水拠点で水を補充することが必要であった。
- ・現地の状況は、避難所付近の標高の低いところは住宅等ほぼ壊滅。集落は山間部はほぼ被害なしだが、山裾付近は壊滅。電気は仮設電柱にてほどなく復旧した模様。携帯電話は繋がる状態であった。ガスはプロパンのところが多いらしく、水道水だけが無いというような状況であった。
- ・水道管の被害状況などを調べるため、市役所を訪れたが、市役所内は混乱を極めており、水道管のどこが破損し、復旧の目処はいつかなど全くわからない状態であった。
- ・毎日、午前6時に起床、洗顔・朝食を取り、午前7時30分から作業開始、午前分を廻りきった後で昼食、その後は午後5時30分～6時頃まで給水活動、宿舎に戻り夕食を取ったあとで班内ミーティングを1時間程度行い、改善点等について話し合いを行った。

現地からの職員レポート（2011/04/13 撮れたて箕面ブログ掲載）
--

上下水道局 （任務：応急給水支援）

4月9日（土曜日）に出発し、翌10日（日曜日）から16日（土曜日）まで、岩手県大船渡市で応急給水支援活動を行っている箕面市上下水道局職員2人から、中間活動報告が入りましたので、お伝えします。



活動を開始した10日の大船渡市の水道復旧状況は、15,600戸中660戸で、復旧率4.2パーセントとのこと。翌11日には10,500戸が復旧したものの、12日も前日と同じ状況でした。

現地での給水は、避難所等の定点で給水車を止めて行うのではなく、個別の家を訪問して給水する方法で行っています。箕面市は豊中市と班を組んで活動しています（給水車は豊中市のものです）。

現地の方はこんな大変な状況にもかかわらず、優しく接していただきました。本当に良い方ばかりです。私たちの方が被災者のみなさんからたくさんの笑顔と感謝をいただきました。

出発前は、避難所等の定点での給水活動と思っていました。しかし、高齢者の方などは重いポリタンクを運ぶことは困難です。私たちが、ポリタンクを抱え個別の家へ給水を行っています。

重労働になり大変ですが少しでも被災者の方々の要望に応えるべく活動を行っています。

職員手記

上下水道局 山本 貴行 (任務：応急給水支援)

私は神戸市在住で、先の阪神淡路大震災では一被災者として災害を体験しました。あのときの記憶はいまも脳裏に焼き付いており、一生忘れることができません。

体験者の体験談として、大災害が起こった際には、まずもって一番重要なことは、「生き残る」ことです。

まず、自分自身と家族の身の安全を確保し、近隣への声掛け、住宅の破損状態、周辺環境の破損状態の確認を迅速に行わねばなりません。

そして、安全を確認できたあとにくるのが、「この先どうやって生き延びて行くか。」です。

大規模な災害が起きた場合、都市機能は完全に麻痺します。逃げ出したいくなる気持ちもわかりますが、車で移動は大渋滞を引き起こし、緊急車の妨げになります。阪神淡路大震災のときに一番活躍したのはマウンテンバイク（自転車）でした。

次にすべきことは、水と食料の確保です。水道管は阪神淡路大震災以降、耐震管が使われるようになりましたが、今回の東日本大震災の派遣先では完全に断水状態でした。

私は当時、お風呂にためていた水を煮沸し、ろ紙でろ過して少しずつ飲んでいました。周辺のコンビニやスーパーなどは完全に閉鎖され、近隣市では買い占めが横行し、水も食料も入手できません。緊急時用の災害バッグがあったとしても、家族4人で分け合うと3日と持ちません。

現在では、各地域ごとに災害時避難拠点があると思いますが、救援が届くのは居住地にもよるでしょうが、最短でも3日ほどかかるのではないのでしょうか。

水も食料もなく、電気・水道・ガスがない状況下で時間を過ごすのは大変なストレスとなります。

東日本大震災が起きたとき

TVのニュースで東北の悲惨な状況を目にしたとき、私は全身に鳥肌が立ちました。恐るべき津波の破壊力… 家や車がおもちゃのように流されていく…

私が体験した震災とはまた違う惨状。季節は冬、しかも東北ではどれだけの寒さだったのでしょうか。

家も家族も何もかもを無くし、途方にくれる被災者の方を見たとき、私はすぐに決断しました。

「必ず水道の応援要請がくる。自ら志願し災害派遣に行こう。」と。

そして、予想どおり応援要請が日本水道協会を通じて箕面市にも来ました。災害対策担当の上司から電話をいただき、「お前、東北行くか？」と聞かれたとき、「行きます！行かせてください。」とお願いしました。

私は水道職場に配属されて20年。この間、水道に関する様々な知識・技能を得ることができました。

そして、被災地では絶対に水で困っているはずと確信し、いつでも出発できる準備を行いました。

水道水だけは、個人ボランティアではどうすることもできません。水道の組織力を発揮しなければ被災地に水を届けることはできないと知っていました。

しかし、派遣第一陣に任命はされたものの、被災地の受け入れ態勢が整わず、出陣まで約1ヶ月足踏み状態が続きました。

その間、私はネットで広がる支援の輪を知り、それに参画しました。

ネットに次々と情報がアップされ、その悲惨さが身にしみてわかりました。毎日涙をこぼしていました。

いったいどれだけの人が亡くなったのだろうか……

毎日、映像やブログ、twitter等で情報を得て、自宅からネットでできる支援を続けました。家族で義援金募金も何回となく行いました。

そしてようやく、箕面市水道災害派遣第一陣の出陣日が決定しました。

家族に必ず無事に戻ってくることを約束し、家を出ました。

被災地に着いたとき

基地局である盛岡市新庄浄水場周辺は、高台にあることもあり、穏やかな様子でした。

ですが、大船渡市に着いたとき……

一面に積み重ねられた瓦礫の山、山、山……

ひしゃげた鉄道レール。中身が完全に無くなり、外壁だけ残っているコンビニやマンション。老齢と思われる大きな木の枝にぶらさがった自動車、あり得るはずのない場所に留まっている船。

ニュースやネットの動画ではわからなかった現地の想像を絶する光景……

絶句しました。

そして、現地でしかわからないこと。

それは、なんとも表現しがたい臭いと、風が吹くたびに舞い上がる砂塵。

「これは本当に想像を超えている。真剣に取り組まねばならない。」と改めて決意を込めました。



応援給水活動中

私たちの班が担当した赤崎地区は、港に近く、平野部は完全に壊滅。家が建っている地盤の高さがおおよそ5m違うだけで、完全に家ごと無くなっているか、まったくの無傷かのどちらかでした。

しかし、そんな状況下にあっても、現地の人々は力強く、我慢強く、試練を乗り越えようとされていました。

給水車で広報を流すと、みなさん家から様々な容器を手に出てこられました。

みなさん一様に笑顔でした。元気な子どもたちもいました。

「悲惨な状況下にあっても、前を向いて生きていくしかないんだ。」

そんなお気持ちが伝わってきました。

毎日の給水応援活動は、拠点給水ではなく移動給水だったため、身体的には相当にきつい活動でした。

お年寄りが多いため、水を入れた20Lタンクを坂道を登って玄関先に置くということもしばしばでした。





「いやいや、大丈夫。自分で運べるから。毎日ありがとうな。」という元気なおじいさんもいらっしゃいました。

毎日、「ありがとう。」のお言葉を頂きました。幼いかわいらしい姉妹は毎日私達が来るのを外で待っていてくれました。この子達の笑顔に毎日どれだけ励まされたかわかりません。

普段、通常業務をしていて、「ありがとう。」を言っていただけのことには皆無です。

ですが、東北の方たちは、ご自身が被災していらっしゃるにも関わらず、毎日「ありがとう。」と一緒に、「公務ですから…」とお断りをして、「いやいや、みなさんで飲んでください。」と栄養ドリンクをくださったり、手焼きのパンをくださったり。

毎日クタクタになりながらも、優しい方々にふれる喜びが翌日の活力をくれました。

水道職場で働いていて良かった。派遣にこさせてただけて良かった。と実感できました。

そして、任期を終え、次の班に引き継ぐ日の朝。

一人のおばあさんがおっしゃってくださいました。

「あなだがだは、ほんとに優しい。遠い所がらぎで、毎日水さ運んでぐれで、感謝しでます。まんず忘れねがら。」

派遣活動中に悲しみをみせる方はいらっしゃいませんでした。だからこそ、私も絶対に涙は見せるものかと誓っていましたが、このお言葉をいただいた時に思わず涙がこぼれてしまいました。

帰阪して

派遣前は、「何とか力になってあげたい。水を運んであげたい。助けに行くんだ。」という気持ちでおりました。

ですが、無事に任務を終え帰阪した際に感じたのは、日本人本来の優しさ、たくましさ、力強さ、我慢強さでした。

応援に行ったつもりが、励まされて帰ってきた気持ちになりました。

私は、東北は必ず復興すると信じています。

なぜならば、「人の強さ」を真に持っていると感じたからです。

いまだに仮設住宅にお住まいの方、遠い知らない土地で暮らしている方、家族を亡くし、仕事を無くし、絶望の淵にあってもなお前を向いている方。

本当にすばらしい方々にお会いすることができました。

一刻も早い復興を願ってやみません。

最後に、派遣されるに当たり、送り出して下さった上司、その間通常業務を担ってくださった職場のみなさん、お守りをくださった友人、家族。

みなさんに心からのお礼を申しあげて、私の手記とします。 平成24年
2月24日

職員手記

上下水道局 江口 朝日光 (任務：応急給水支援)

派遣先：岩手県大船渡市

派遣期間：平成 23 年 4 月 24 日～平成 23 年 5 月 1 日

私達が担当した大船渡市の後之入地区と山口地区は、それぞれの集落の入口が津波の被害をもろに受け、流された家や漁船、ガレキが入り混じっていた。給水活動を行った区域は、高低差などによりなんとか難を逃れた家々が多かったが、中には数日後に取り壊されるという家もあった。

給水活動を始めううえで助かったのは業務の引き継ぎ方法であった。実際に現地を回り具体的な注意点を聞いたり、給水活動を行っている様子を見学させていただいた。これで活動に対する不安はかなり解消され、割とスムーズに給水活動へ入ることができた。

活動中心がけたのは、気配りと安全確認である。水の入った重い容器を何度も往復して運ばれているおじいさんを見かけたら玄関近くまで給水車を着けたり、遠い所から一輪車を押して来られているおばさんがいるの



が分かればルートを増やすなど被災された方々の負担が少しでも軽減できるように気配りをしたつもりである。

私は給水車の運転をしていたが、少し慣れてきた頃、後ろに乗っていた班長

さんが降りようとされているのに気付かずバックしそうになりヒヤッとしたことがあった。それからは、お互いに声かけを行うなど事故防止に心がけた。

応援給水活動を通じて一番心に残ったのは、現地の人々の謙虚さと忍耐強さである。

給水活動中にかけてられた言葉は「ありがとう」など感謝の言葉ばかり。長期間水道が使えず不自由な生活が続いているはずなのに、苛立ちや怒りの言葉は聞かなかった。そればかりか、「遠い所からご苦労様」と栄養ドリンクやお菓子など沢山いただいた。なかでも、「お昼ご飯にでも」といただいた大きなおにぎりや漬け物の味は心に染みた。

6日間という短い活動期間だったが、生涯忘れることのできない貴重な経験をさせていただいた。いつの日か、復興を遂げられた大船渡を訪れてみたいものである。

職員手記

上下水道局 白井 康昭 (任務：応急給水支援)

派遣先：岩手県大船渡市

派遣期間：平成 23 年 4 月 24 日～平成 23 年 5 月 1 日

派遣前、現地の状況は、マスメディアの情報等でしか知り得る術はなく応援給水を具体的にどう行うのか、不安があったのは事実です。被災地までの 14～16 時間程度の道のりのなかで、次第に応援給水のイメージを膨らませていたように思います。現地到着日の午後から具体的に応援給水を開始したことから、活動しながら現地の被災状況や被災者の置かれている環境等を 1 つずつ確認しました。

大船渡市では、沿岸部がほぼ壊滅状態にありましたが、幹線道路のがれき等は撤去されており、津波の被害を直接受けていない丘陵部においては、津波が到達しておらず日常的な風景のままでした。

我々は、主に津波の受けていない丘陵部における戸別の応援給水活動行いました。

給水先は、沿岸部で被害を受け、家屋等が流され住居をなくした方々が丘陵部の親戚の家に避難され、生活されているところへの給水でした。お年寄りの世帯がほとんどで、その家屋の玄関先まで水を運ぶことが多々ありました。

派遣における活動の指揮系統は、大船渡市との情報共有を大阪市が行い、派遣者のまとめ役に豊中市がなっていたのですが、大船渡市における水道施設の被害状況などは活動中、ほとんど情報を得られないような状態であり、修繕や補修計画の規模など全くわからない状態にありました。

派遣の目的が応援給水活動でしたので、現地における活動の中心は給水のみとなっていたわけですが、派遣者は、給水活動に関わる以外の施設の被害状況など情報として確認しておきたい事象もあった訳ですが、残念ながらそれはできませんでした。

災害の規模や被害状況等により応援規模は変わりますが、被災地に応

援活動のコーディネート役をかってでてもらうのは、非常に困難であり、かつ不可能であると感じました。裏をかえせば、派遣をする側でとりまとめ役やコーディネート役を必ず決定し、現地においてはそのまとめ役に従って活動するという、普段当たり前に想像できることを現地で実践できなければならないと痛切に感じました。

今回、幸いにもそのとりまとめ役を担っていた豊中市は、きっちりと的確にその役目を果たしており、それを実践するための準備が、常日頃からできていたんだと感じました。

応援が的確に行える人的余裕やそれを可能にする環境等、本市においても課題が残ると感じました。

職員手記

上下水道局 江口 善浩 (任務：応急給水支援)

派遣先：岩手県大船渡市

派遣期間：平成 23 年 5 月 9 日～平成 23 年 5 月 16 日

私は、震災直後の支援第 1 陣（3/16～21）として 3 月 16 日に岩手県盛岡市の新庄浄水場へ出発する予定でしたが、現地の支援受け入れ態勢が整っていないとのことで、前日の夕刻に待機となりました。

実際の出動は、5 月 9 日から 16 日で箕面市からの第 3 陣として応急給水作業をして参りました。

当手記においては、第 1 陣として出発するために準備した当時の状況と内容、ならびに第 3 陣として実際に現地で活動した際に見聞したこと、気づいたことなどをまとめることとします。

1. 震災直後の出動準備

当初、日本水道協会から本市への出動要請が 3 月 13 日の夕刻にあり、第 1 陣として局内で出動要請があったのが 3 月 14 日朝でした。13 日夕刻の日本水道協会から本市への出発要請の時点では、行き先が福島県郡山市でしたが、15 日には岩手県盛岡市に変更となっており、現地での支援受け入れに対する混乱がうかがえます。

そのような状況で、実際の支援基地（宿舎）、給水活動都市も決まらないなか、如何にして支援隊員の体調管理をすればよいか悩みました。被災地の様子は、テレビ報道などから厳しい寒さが見て取れ、宿泊は屋外でテントもあり得ることでしたから、防寒対策と自炊できる食料確保に努めましたが、これで十分なのか、不足がないのか、現地調達など期待できないなかで、かなり不安を感じながら、支援隊員の寝食に関する準備に時間を要しました。

物資確保においては、被災地支援のため乾電池やカセットコンロのボンベが店頭からなくなり、調達に苦労しました。ガソリンについても、被災地に供給できていない状況でしたので、携行タンクを用意しました。

2. 派遣先の様子

派遣先は、岩手県大船渡市で日本水道協会大阪府支部の応援給水部隊として、現地で5日間の給水活動に従事してきました。

実際に現地へ支援に入ったときには、被災後約2ヶ月が経過しており、主要な道路のがれきは撤去されており、車両の通行は可能な状況でした。それでも、信号機の倒壊、橋梁の継ぎ目の段差、道路排水不良による路面冠水などがあり、車両運行には神経を使わなければなりませんでした。

道路周辺の宅地は、津波により建物の基礎部分のみを残し壊滅的な被害をうけており、事前に報道等で被害状況は認識していたものの、実際に現場に立つと被害のスケールと油と潮の混ざり合った臭いに衝撃を受けました。



3. 応援給水活動

応援給水した地域は、配水ポンプ場が津波で破壊されており断水状態であったため、朝・昼の1日2回給水車で各戸への移動給水をしました。各戸に用意されている容器は様々で、ポリタンク、ペットボトル、たらい、鍋と大小形状まちまちでした。中には、支援都市が配布した容器もあり、支援都市の日頃の備えが見て取れました。給水を受けに来られる方の大半が高齢の方で、大きな容器は玄関内まで運搬を手伝うなど体力的にハードでしたが、必ずかけてくださる感謝の言葉をエネルギーにしていました。(かなりの数のドリンク剤の差し入れももらいました)

各戸で確保される水は飲食用で、入浴は地区会館の風呂を使い、洗濯などは地区を流れる河川の上流でされていたようです。地区の中には、井戸や河川表流

水を昔から使用されており、給水を必要とされないお宅もあり、自然の中で利用できる資源があることの貴重さ、ありがたさを痛感しました。大都市であれば、入浴や洗濯が出来る水量を給水車で配ることは不可能に近いと思います。

4. 支援体制

日本水道協会大阪府支部のなかでも、北大阪ブロックは大船渡市内の民宿が確保でき、支援地域には15分程度で到着できる環境にありましたが、他ブロックは北上市内のホテルから約2時間をかけて通わねばならない状況でした。また、同じ大船渡市内でも他県からの団体は、公共施設で寝袋、風呂なしという処遇のところもあったので、支援活動外の生活面は不自由な状況で恵まれていました。



活動で使用した給水車は豊中市の車両で、加圧ポンプも実装しており機能面に問題はありませんでした。本市の給水タンク（トラックにタンクを積載するだけ）では、出動したとしても拠点給水など活動範囲に制約があると感じました。

服装などの装備に関しては、先発隊からの情報もあり、不足することはありませんでしたが、現地で出会う他都市との情報交換では、がれき処理などの過酷な作業であっても安全靴がないなど、派遣職員の労働安全面で問題のある都市も見受けられました。

支援する側が怪我をしていては、現地に迷惑がかかりますので、支援するからには現地の状況を的確に判断して万全の体制で臨むべきであると思います。